別添4

令和7年度厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)
障害者自立支援機器開発に携わる医療・福祉・工学分野の人材育成モデルの普及促進に資する研究
分担研究報告書

構築する人材育成プログラムを各専門領域に導入するための指針・マニュアルの作成

研究分担者　出江紳一　国立障害者リハビリテーションセンター研究所　外来研究員
研究分担者　吉田俊之　埼玉県立大学地域連携センター　教授
研究分担者　松田雅弘　順天堂大学保健医療学部　教授
研究分担者　門馬　博　杏林大学保健学部　講師
研究分担者　東　祐二　日本作業療法士協会　事務局員
研究分担者　福岡達之　広島国際大学総合リハビリテーション学部　教授
研究分担者　二瓶美里　東京大学大学院情報理工学系研究科　教授

研究要旨　支援機器の開発や利活用を円滑に進めるためには、医療・福祉の専門職や開発者等の人材育成が必要不可欠である。医療福祉専門職の養成校教育や生涯教育において、知識レベルに応じた各領域での適切なプログラム作成が求められているが、人材育成プログラムは十分に整備されておらず、そのための指針やマニュアルが存在しないのが現状である。そこで昨年度に引き続き、医療福祉専門職の養成校学生および現役専門職を対象に、支援機器の教育に関するアンケート調査を実施し、その結果と各協力団体の人材育成プログラム内容を踏まえ、支援機器人材育成プログラム導入指針・マニュアル案を作成した。

アンケート調査では、専門職学生 1,812 名、現役専門職 5,152 名から回答を得た。その結果、医療福祉専門職および養成校の学生は、支援機器の利活用には高い関心がある一方で、開発に関する教育経験は乏しいことが明らかとなった。これにより、支援機器の開発や利活用への関心は座学・演習・臨床経験によって喚起され、特に実習や臨床での体験が重要であることが示され、実習や体験などの実践的教育や現場に即した学習機会の充実が求められていることが判明した。これらの結果と各協力団体の人材育成プログラム内容を踏まえ、支援機器人材育成プログラムの導入指針案およびマニュアル案を作成した。また、人材育成プログラムを作成している各協力団体の担当者に対してヒアリング調査を実施し、有用性に関して高い評価と改良のための示唆を得た。それに基づき、指針・マニュアルを修正し、完成版とした。

A. 研究目的

障害者自立支援機器(以下、「支援機器」という。)は、障害者の多様なニーズに応じ、生活機能を支援するうえで不可欠な要素である[1)]。近年、社会の包摂性の進展により障害者の生活様式は多様化しており、それに伴い支援機器に求められる機能やデザイン、サービスも複雑化している。一方で、これら支援機器の利活用や開発が十分に進んでいるとは言い難い。こうした背景には、利用者の生活特性を理解し、適切な開発・評価・普及を担う医療福祉専門職の基礎知識・スキルの不足がある。具体的には、医療福祉専門職が開発プロセスに十分関与できていないことや、利活用に必要な実践的技能の習得機会が限られていることが挙げられる。また、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、視能訓練士といった多様な職種間、および工学・産業・行政等の多領域間における連携体制(多職種協働)が十分に機能していない点も大きな課題である[2)]。支援機器の創出と実装は、単一の職種で完結するものではなく、それぞれの専門性を統合した協働が不可欠である。

この課題の背景には複合的な要因が存在する。第一に、現行の各専門職養成課程は、国家試験対策や医療現場で活用される技能の習得を主軸とした教育が行われ、支援機器に関する教育や実践的学習の機会が不足している。第二に、医療福祉専門職の免許取得後、各専門職団体が実施している生涯教育制度においても、支援機器に関する開発普及のためのプログラムは十分に整備されていないため、医療福祉専門職の知識・技能にばらつきが生じ、臨床現場での機器選定の提案や適合支援に、ばらつきが生じている。最後に、支援機器の開発や利活用を促進する人材を育成するための体系的なプログラムおよび組織的な導入指針は確立されていない。

よって、本研究では、医療福祉専門職を対象に、支援機器の開発および利活用を推進するための「導入指針案」および「導入マニュアル」を策定することを目的とした。

B. 各専門職領域での養成校学生及び現役専門職の支援機器教育に関する現状把握

理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・視能訓練士・歩行訓練士・医師各領域の養成校に在籍する学生及び現役で働く医療福祉専門職の支援機器の開発・利活用や支援機器教育受講に対する関心等の実態を把握するため、全国的なアンケート調査を実施した。

表 1 アンケート調査項目（養成校学生）

調査項目	
カテゴリ	具体的な聴取内容
回答者の基本情報	• 基本情報 ➢ 専門領域、学校種別、学年
支援機器に関する学習経験	• これまでの支援機器教育の受講状況 ➢ 学習した時期ごとの内容（養成校教育） ➢ 学習経験による影響
支援機器に関する関心	• 支援機器開発・利活用に対する関心 • 支援機器教育の受講に対する関心 • 支援機器開発・利活用に関心をもったきっかけ/関心をもつために必要なこと
支援機器教育に対する希望	• 受講してみたい支援機器教育 ➢ 受講してみたい授業の内容

表 2 アンケート調査項目（現役専門職）

調査項目	
カテゴリ	具体的な聴取内容
回答者の基本情報	• 基本情報 ➢ 専門領域、職場種別（病院/クリニック/入所系介護施設/通所系介護事業所/訪問系介護事業所/その他）、経験年数
支援機器に関する学習経験	• これまでの支援機器教育の受講状況 ➢ 学習した時期ごとの内容（養成校教育、生涯教育） ➢ 学習経験による影響
支援機器に関する関心	• 支援機器開発・利活用に対する関心 • 支援機器教育の受講に対する関心 • 支援機器開発・利活用に関心をもったきっかけ/関心をもつために必要なこと
支援機器教育に対する希望	• 受講してみたい支援機器教育 ➢ 受講してみたい授業の内容

アンケート調査期間は、令和7年 9 月 8 日～11 月 30 日とした。学生に対するアンケート調査項目は、表1、現役の医療福祉専門職に対するアンケート調査は表2のとおり。

本アンケート調査は、順天堂大学保健医療学部研究等倫理審査委員会にて承認を受けた。(25-014)

1. 養成校学生に対する アンケート調査回答結果

専門職養成校に在籍する学生にアンケート調査を配布し全 1,812 件の回答が得られた。そのうち、「作業療法」が 855 件と最も高く、次いで、「視能訓練」が 419 件、「理学療法」が 319 件、「言語聴覚療法」が 214 件、「医学」が 5 件、「視覚障害者歩行（生活）訓練」が 0 件であった。なお、視覚障害者歩行（生活）訓練については、国内の全学生数が 10 名程度であったこと（2025 年 9 月時点）、また、そのすべてがアンケ

ート調査実施月に卒業を迎えたため、回答が得られなかった。

2. アンケート結果（詳細は添付資料3）

養成校教育では、理学療法・作業療法・言語聴覚療法・視能訓練で約8割が支援機器の利活用に関する座学、約 5 割が実習（演習）の学習経験があった。支援機器の開発に関する座学の経験がある人は、理学療法・作業療法で約 17%、言語聴覚療法・視能訓練では約 6%だった。また、支援機器の開発に関する実習（演習）の経験がある人は、作業療法が最も多く約 11%、理学療法・言語聴覚療法・視能訓練はいずれも 5%以下だった。（Q4）

養成校教育の興味関心等への影響について、全領域で7割以上が、影響があったと感じていた。（Q5 ）

支援機器の開発について、理学療法では約5割、作業療法では約 6 割、言語聴覚・視能訓練では約 4 割が、関心があると回答した。関心をもったきっかけとしては、全領域で座学形式の授業と回答した割合が最も多く、次いで演習形式の授業や臨床実習がきっかけとなっていた。開発に関心がないと回答した人においては、臨床実習や、将来現場で支援機器が必要な障害者を担当することが関心をもつきっかけになりえると感じている人が多かった。（Q6,7）

支援機器の利活用において、理学療法・言語聴覚療法で約 7 割、作業療法で約 8 割、視能訓練で約6割が、関心があると回答した。関心をもったきっかけとしては、全領域で座学形式の授業と回答した割合が最も多く、次いで演習形式の授業や臨床実習がきっかけとなっていた。利活用に関心がないと回答した人においては、臨床実習や、座学・演習形式での授業が関心をもつきっかけになりえると感じている人が多かった（Q8,9）

支援機器に関する今後の学習意向として、理学療法・作業療法・言語聴覚療法では 8 割以上、視能訓練では 7 割弱が支援機器に関する授業等を受講したいと感じていた。なかでも支援機器の利活用に関する実習（演習）を希望する割合が最も高く、次いで支援機器の利活用に関する座学、開発に関する演習・座学の希望が多かった。（Q10,11）

学年ごとでは、修士課程・博士課程の学生では開発に対する関心がやや高く、利活用については全学年 8 割弱の学生が関心があることが明らかになった。（学年分類）

3. 各専門領域での養成校学生における支援機器教育に関する現状の整理

支援機器の開発について、理学療法では約 5 割、作業療法では約 6 割、言語聴覚・視能訓練では約 4 割が、関心があると回答した。また、支援機器の利活用において、理学療法・言語聴覚療法で約 7 割、作業療法で約 8 割、視能訓練で約 6 割が、関心があると回答した。令和 6 年度「障害者自立支援機器開発に携わる医療・福祉・工学分野の人材育成モデルの普及促進に資する研究」において実施した専門職養成校を対象としたアンケート調査では、教員に回答を依頼し、支援機器開発・利活用に関心を持つ学生の割合を教員の視点から聴取した。その結果、支援機器開発について、「関心を持っている学生はいない」、「1 から 2 割程度の学生が関心をもっている」と回答した養成校がいずれの領域においても8から9割程度、支援機器利活用について、「関心を持っている学生はいない」、「1 から 2 割の学生が関心をもっている」と回答した養成校がいずれの領域においても7割程度であり、教員の視点では、学生の支援機器開発・利活用への関心が低いと考えられていることが明らかとなっている。今年度の調査結果と令和6年度の調査結果を比較すると、教員が感じている以上に学生は支援機器の開発・利活用に対して関心を持っている可能性があると考えられる。

また、支援機器の開発・利活用に関心を持ったきっかけとして、座学形式の授業や演習形式の授業、臨床実習と回答した割合が高く、現在の福祉用具や支援機器に関する学習カリキュラムも関心を喚起する要因となることが明らかになった。学年別の分析においても、主に研究活動を中心である大学院生を除くと、最終学年である 4 年生の支援機器の利活用に対する関心が最も高く、4 年生は支援機器の利活用に関する学習を受講したことがある割合が多く、養成校での学習を通じて関心が高まっていると考えられる。一方、

支援機器の開発・利活用に関心がないと回答した人においては、臨床実習や将来専門職として勤務するようになってから支援機器が必要な障害者を担当することが関心を持つきっかけになると考えている割合が高く、机上の学習のみならず、障害当事者との関わりを通じて、支援機器の必要性の理解を促すことが、支援機器の開発・利活用への関心を喚起するために重要な要因であると考えられる。

さらに、学年別に支援機器の開発・利活用に対する関心を分析したところ、修士課程・博士課程の学生では開発に対する関心が他の学年に比べて高いことが明らかになった。修士課程・博士課程の学生においては、自身の関心領域に合わせて、研究室を選択しているため、関心が二極化していると考えられる。今後の支援機器教育についても「とても受講したい」と回答した割合が他の学年に比べて大きく、関心の高い学生に対して重点的にプログラムを提供することが、関心や理解度をより高めるうえでは、重要だと考えられる。

4. 医療福祉専門職に対するアンケート調査回答

各専門領域で働く現役専門職にアンケート調査を配布し全 5,152 件の回答が得られた。そのうち、「作業療法」が 3,624 件と最も高く、次いで、「視能訓練」が 770 件、「理学療法」が 532 件、「視覚障害者歩行(生活)訓練」が 81 件、「言語聴覚療法」が 71 件、「医学」が 54 件であった。

5. アンケート結果(詳細は添付資料4)

生涯教育として、全領域において支援機器の利活用に関する座学および実習(演習)、学会・セミナーへの参加を通じた学習の経験がある割合が高い。支援機器に関する生涯教育の経験がない人の割合は、作業療法・視能訓練が約3割と他領域に比べてやや多い。(Q4)

生涯教育の興味関心等への影響として、理学療法・作業療法・言語聴覚療法・視能訓練では約 7 割、視覚障害者歩行(生活)訓練・医学では約 8 割が、影響があると感じている。(Q5)

養成校教育として、理学療法・作業療法・言語聴覚療法・視能訓練・視覚障害者歩行(生活)訓練では、約7～8割が支援機器の利活用に関する座学の学習経験があった。医学においては、約4割が支援機器の利活用に関する座学の経験があるが、支援機器に関する学習経験がない人も約 4 割存在した。(Q6)

養成校教育の興味関心等への影響について、理学療法・作業療法・言語聴覚療法・視能訓練・医学においては、影響があると回答した割合と影響がないと回答した割合が半々だった。視覚障害者歩行(生活)訓練のみ約 9 割が、影響があると感じている。(Q7)

支援機器の開発について、全領域において 6 割以上が、関心があると回答した。関心をもったきっかけとしては、臨床現場において支援機器を必要とする障害者を担当したことが最も多かった。開発に関心がないと回答した人においても、臨床現場において支援機器を必要とする障害者を担当することが関心をもつきっかけになりえると感じている人が多かった(Q8, 9)

支援機器の利活用において、全領域において 8 割以上が、関心があると回答した。関心をもったきっかけとしては、臨床現場において支援機器を必要とする障害者を担当したことが最も多かったが、視覚障害者歩行(生活)訓練においては、養成校教育をきっかけと回答する人も多かった。利活用に関心がないと回答した人においても、臨床現場において支援機器を必要とする障害者を担当することが関心をもつきっかけになりえると感じている人が多かった。(Q10,11)

支援機器に関する今後の学習意向として、全領域において約 9 割が研修・セミナー等を受講したいと感じていた。なかでも支援機器の利活用に関する実習(演習)を希望する割合が最も高く、次いで支援機器の利活用に関する座学、学会・セミナー等への参加、開発企業との連携による講義・ワークショップの希望が多かった。(Q12,13)

職場種別ごとの支援機器に対する関心として、開発・利活用のいずれも障害事業所に勤務する専門職の関心の割合が高いことが明らかになった。(職場種別ごとの分析)

経験年数ごとの支援機器に対する関心として、開発・利活用のいずれも年次があがるごとに関心のある層がやや増える傾向であることが明らかになった。(経

験年数ごとの分析）

6. 各専門職領域での現役医療福祉専門職の支援機器教育に関する現状整理

支援機器の開発について全領域で 6 割以上、利活用について全領域で 8 割以上、「まあ関心がある」、「とても関心がある」と回答した。いずれについても関心をもったきっかけとして、臨床現場において支援機器を必要とする障害者を担当することと回答した割合が多かった。

また、支援機器の開発・利活用に「あまり関心はない」、「全く関心はない」と回答した人においても、臨床現場において支援機器を必要とする障害者を担当することが支援機器に関心をもつきかっかけになりうると回答した割合が多かった。

視能訓練領域では、支援機器について養成校教育、生涯教育を受けていないと回答した割合が他領域よりも多く、支援機器の開発・利活用について「とても関心がある」と回答した人が少なかった。

支援機器に関する今後の学習意向として、支援機器の利活用に関する実習（演習）や座学形式の研修・セミナー等の受講を希望する割合が大きかったが、自由記述では、実際に担当している患者を例とした症例検討や、支援機器を活用している患者の事例報告等、業務に直結する内容を希望する回答が複数得られた。

また、支援機器に関する学会・セミナーや支援機器開発企業と連携した講義やワークショップ等を望む声もあった。

支援機器開発に関心をもつきっかけに関する自由記述の結果では、業務上の経験、家族・友人等の身近な人の支援機器との関わり、支援機器の見学・体験等の経験、支援機器に関する研究・論文等の情報の入手など、多様な契機によって支援機器の開発への関心が形成されていた。一方、生涯教育において支援機器に関する学習を行ったことがないと回答した人が全体で 27.3%存在していた。

C.人材育成指針・マニュアルの作成

本指針およびマニュアルの作成にあたっては、前年度の研究成果を精査し、現代の支援機器を取り巻く環境変化を踏まえた人材育成の到達目標を再定義した。そのうえで、医療福祉専門職が養成課程から卒後教育までシームレスに学習を継続できるよう、4 つの教育領域に応じたプログラム設計の方針を策定した。作成プロセスにおいては、研究分担者間での定期的な打ち合わせを重ね、「①現状把握、②ターゲット設定、③プログラム内容の議論、④構成案の作成、⑤評価・改善」からなる 5 段階の導入ステップを軸としたフレームワークを構築し、指針・マニュアルの初稿を作成した。

初稿の完成後、本事業において実際に支援機器開発または利活用の人材育成プログラムを作成している協力団体（理学療法、作業療法、言語聴覚療法、視能訓練、歩行訓練、工学、医学等の各学会・団体）に対し、ヒアリング調査を実施した。ヒアリングでは、マニュアルの構成や活用イメージ、用語の定義、各職域における導入の実現可能性（フィジビリティ）について意見を収集した。これらのフィードバックに基づき、プログラムのモジュール化や評価フォーマットの共通化、各領域固有のニーズへの対応といった視点を取り入れ、指針・マニュアル案のブラッシュアップを行って現行案を完成させた。

1.人材育成指針・マニュアル案の作成

各専門職団体や養成校が支援機器教育プログラムを円滑に導入・運用するための成果物として、「支援機器人材育成プログラム導入指針」（添付資料1）および「支援機器人材育成プログラム導入マニュアル」（添付資料2）を作成した。さらに、その要点をまとめた「解説用スライド」を作成した。指針マニュアルを作成するのにあたって、下記の 4 つの視点をもとに作成した。

- 4 つの教育フェーズの定義: 「養成校教育×利活用」「養成校教育×開発」「生涯教育×利活用」「生涯教育×開発」の 4 領域における到達目標と教育内容を提示した。
- 5 段階の導入ステップ: 現状把握、ターゲット設定、内容の議論、構成案の作成、評価・改善という体系的な導入手順を確立した。
- 具体的カリキュラム構成例: 養成校教育や生涯学習の現状を考えて 4 コマから 8 コマ、あるいは数ヶ

月にわたる長期コースまで、組織の状況に応じた実践的なプログラム案の例示することで、各団体が人材育成プログラムを作成しやすくした。

- 多職種連携(IPE)の評価視点: 単一の知識習得にとどまらず、他職種との協働を評価する指標を提示した。

2.人材育成指針・マニュアル案に対する協力団体へのヒアリング結果

作成した指針・マニュアル案の妥当性と実用性を検証するため、理学療法、作業療法、言語聴覚療法、視能訓練、歩行訓練、工学、医学の各専門職団体・学会に対してヒアリング調査を実施した。調査の結果、全体として「プロセスが分解されており非常に分かりやすい」、「プログラム作成の際に指針があると作成しやすい」といった高い評価が得られた。

ヒアリングを通じて得られた主な意見と課題は以下の通りである。導入の柔軟性とモジュール化の必要性を指摘された。医療福祉専門職の養成校の既存カリキュラムは過密であるため、90 分 1 コマから導入できるようなプログラムのモジュール化(小単位化)や、他科目の一部として組み込める形式が強く求められた。

領域固有のニーズと用語の定義が必要である。障害領域(肢体不自由、視覚、聴覚、精神等)によって必要な支援機器や概念が異なるため、各団体の専門性に合わせたキーワードの包含や、用語の明確な定義が必要であるとの指摘があった。

評価フォーマットの共通化の提案があり、プログラム実施後の評価において、団体間で比較が可能な共通の評価フォーマットの整備を求める意見が得られた。

その他に、普及・啓発の方法として、成果物の普及にあたっては、統一的なホームページでの公開、学会誌への投稿、ポジションペーパーの作成、授業風景の録画公開など、アクセシビリティを高めるための重層的な情報発信が提案された。

また、人材育成プログラムに重要な質の担保と講師の確保の必要性を指摘された。プログラムの質を維持するための専門家レビューの必要性や、実体験に基づいた講義ができる講師の選定、および教員側の知識不足を補う仕組みの重要性が共有された。

これらの結果を踏まえ、マニュアル案の最終的なブラッシュアップを行い、次年度以降の実装・試行に向けた基盤を構築した。

D. 考察

本研究で得られたアンケート調査、導入指針・マニュアル案の作成、および協力団体へのヒアリング結果に基づき、以下の通り考察を述べる。

1. 支援機器教育における「関心」と「実体験」の相関

アンケート調査の結果、養成校学生および現役専門職の双方が、支援機器の利活用に対して極めて高い関心(8 割以上)を有していることが明らかとなった。一方で、支援機器開発に関する教育経験は乏しく、特に関心が喚起されるきっかけとして「座学」以上に「実習や臨床での体験」が重要視されている。 特に、教員が想定している以上に養成校の学生側の開発・利活用への関心が高いというギャップである。これは、現行のカリキュラムが国家試験対策に偏重し、生活支援の実践的視点が不足している現状を示唆している。今後は、学生が障害当事者と接し、ニーズを直接肌で感じる機会を意図的に組み込むことが、教育効果を最大化する鍵となる。また、これらの支援機器の開発と利活用に関わる人材不足の懸念があり[4)]、医療福祉専門職のスキルの底上げを養成校教育から生涯教育へと一貫とした体制が重要だと考えられる。

2. 導入指針・マニュアルの汎用性と柔軟性

本研究で構築した「4 つの教育フェーズ」と「5 段階の導入ステップ」という枠組みは、協力団体から「プロセスが分解されており分かりやすい」と高い評価を得た。しかし、ヒアリングを通じて、各領域の教育現場が抱える固有の課題も浮き彫りとなった。

医療福祉専門職の養成課程はカリキュラムの過密化が起こっており、養成校教育においては、既存科目を圧迫しない「90 分 1 コマ」単位でのモジュール化(小単位化)が必須である。また、各専門職領域に固有の定義があり、領域ごとに馴染みのある概念やキーワードをマニュアルに包含し、読み替えを可能にすることが導入のハードルを下げる必要性がある。

また、受講の対象者となる職種などに今までの教育プログラムに多様性があり、医師など多忙な職種に対しては、長期間のプログラムではなく、興味のある部分だけを学べる「ライトな入り口」を設ける工夫が求められる。

3. 多領域協働(IPE)を支える人材の育成

支援機器の開発と利活用は、単一の専門職で完結するものではなく、医療・福祉・工学・産業の視点を統合した多領域協働が不可欠である。 本マニュアルで提示した「コーディネート機能を担う人材」の育成には、単なる知識習得にとどまらず、他職種の専門性を理解し、共通言語で対話できる能力(IPE)の評価が必要である。ヒアリングでは「開発側の視点が弱い専門職を補足する内容」への期待も高く、ユーザー視点と開発視点の橋渡しができる人材の輩出が、本邦の支援機器産業の活性化にも寄与すると考えられる。

4. 持続可能な教育体制と普及戦略

成果物の普及にあたっては、単なる PDF の配布にとどまらず、「アクセシビリティ」と「質の担保」の両立が課題となる。人材プログラムの指針とマニュアルの普及の方法として、統一的なホームページでの公開、学会誌への投稿、授業風景の録画公開など、教員側が「教え方」を参考にできる仕組みが有用である。
人材育成のプログラムの質の維持として、プログラムが拡散する過程での質の低下を防ぐため、専門家によるレビュー体制や、修了者がわかる仕組みの検討が必要である。

以上のことから、作成した指針・マニュアルは、各組織のレディネスに応じた段階的な導入を可能にする有効なツールとなり得ることが確認された。今後は、試行導入を通じて各団体の具体的なカリキュラム案を蓄積し、より実践的な「具体例を伴うマニュアル」へとブラッシュアップを重ねる必要がある。

E. 結論

本研究では、障害者自立支援機器の開発および利活用を推進する医療福祉専門職を育成するため、体系的な「導入指針案」および「導入マニュアル」を策定した。本研究を通じて得られた主要な結論は以下の通りである。

1. 標準的教育枠組みの確立

「養成校教育」から「生涯教育」までを網羅する 4 つの教育フェーズと、組織への導入を円滑にする5段階の導入ステップを定義したことで、各専門領域がそれぞれのレディネスに応じてプログラムを構築・運用できる共通の基盤を構築した。

2. 教育ニーズと現状の乖離の可視化

アンケート調査の結果、養成校学生および現役専門職の 8 割以上が支援機器の利活用に高い関心を示している一方で、開発教育の経験は著しく乏しい現状が明らかとなった。特に学生側の関心は教員の想定を上回っており、臨床実習や当事者との関わりを軸とした実践的な学習機会を意図的に組み込む必要性が示唆された。

3. 指針・マニュアルの実用性の確認

協力団体へのヒアリングの結果、作成した指針・マニュアルは「プロセスが分解されており非常に分かりやすい」「プログラム作成の際の基準として極めて有用である」との高い評価を得た。一方で、既存の過密なカリキュラムへの導入を容易にするための「プログラムのモジュール化(小単位化)」や、領域ごとに異なる「専門用語の定義」の必要性が、全国展開に向けた重要な鍵であることが確認された。

4. 多領域協働(IPE)の推進

支援機器の創出と実装には、医療・福祉・工学・産業・行政が連携する多領域協働が不可欠である。単一職種の枠を超えた持続可能な教育体制を構築するうえで有効なアプローチとなる。

以上の成果により、各学会や教育機関が支援機器教育を標準化し、質を担保しながら普及させるための基盤が整った。今後は、本指針に基づくプログラムの試行導入を通じて、領域ごとの具体的なカリキュラム案を蓄積し、より実践的な活用事例を伴うマニュアルへと洗練させていくことが求められる。

F. 参考文献

1)厚生労働省. 生活支援技術革新ビジョン勉強会報

告. 2026-04-16.
https://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/yogu/dl/kanousei.pdf
2) 田上未来、井上剛伸. 障害者の自立支援機器開発の施策について. 日本義肢装具学会誌 37(2); 112-114.
3)日本理学療法士学会、日本支援工学理学療法学会. 福祉用具・義肢・装具支援に関する啓発と実態調査～福祉用具編～. 2018.3
4)井上剛伸、松田雅弘. リハビリテーション工学教育の現状と課題. リハビリテーション・エンジニアリング 40(3); 134-137, 2025

G. 研究発表

1. 論文発表

1)井上 剛伸, 松田 雅弘.【担い手の育成に向けたリハビリテーション工学教育】リハビリテーション工学教育の現状と課題. Rehabilitaion Engineering. 2025; 40(3): 134-137
2)Harada Y, Sawada Y, Momma H, Takeshima R, Suzurikawa J: A nationwide survey on 3D printer utilization among occupational therapists in Japan. Disability and Rehabilitation: Assistive Technology. 2025; 20(8): 1-15

2. 学会発表

1)出江紳一:末梢磁気刺激を用いた感覚運動障害の治療戦略. 令和 7 年度埼玉県リハビリテーション医会第 1 回特別講演会、特別講演、2025.7.12、さいたま市
2)出江紳一:低強度経頭蓋電気刺激(tDCS、tACS など)の基礎知識と安全な使用. 第 55 回日本臨床神経生理学会学術大会 教育講演 2025.11.14、宜野湾市
3) 松田雅弘, 浅川康吉, 白銀暁, 山本尚明, 荒川航樹, 門馬博, 大西秀明, 掛川圭, 井上剛伸. 理学療法領域の支援機器人材育成プログラム構築. LIFE 講演概要集. 2025; PDF
4)東 祐二, 井上 薫, 伊藤 祐子, 出口弦舞, 北島 栄二, 作業療法領域の支援機器人材育成プログラム構築(オーガナイズドセッション:各専門領域における支援機器人材育成プログラムの構築), LIFE 2025, 2025-8.27.
5) 門馬博: 障害者自立支援機器の開発・利活用に関わる理学療法士の育成～卒前教育の視点から～. 第 14 回日本支援工学理学療法学会学術大会, 2025.12.21, 北九州市
6)福岡達之, 永見慎輔, 黒羽真美. 言語聴覚領域の支援機器人材育成プログラム構築(オーガナイズドセッション:各専門領域における支援機器人材育成プログラムの構築), LIFE 2025, 2025-8.27.

H. 知的財産権の出願・登録状況

1.特許取得

特になし

2.実用新案登録

特になし

3.その他

特になし

支援機器人材育成
プログラム導入指針
（案）

目的と基本方針

1.本指針の目的

本指針は、教育機関および専門職団体が、支援機器開発・利活用に関する人材育成プログラムを効果的に導入する際に考慮すべき項目を、**5段階の導入ステップ**に沿って示すことを目的とする。

2. 基本方針

1）学習者中心（Learner-Centered）
受講者のニーズと専門性に応じて、柔軟に内容を調整する。

2）段階的育成（Progressive Development）
基礎 → 応用 → 実践の３段階で能力を育成する。

3）多領域協働（Interdisciplinary Collaboration）
医療・福祉・工学・産業の視点を統合し、多職種の協働を促進する。

4）持続可能な運営（Sustainable Operation）
内部講師・外部講師・e-learning を組み合わせ、どの機関でも継続的に運用できる教育体制を構築する。

人材育成プログラム導入のための「5段階の導入ステップ」

①　現状把握（Needs Assessment）
・対象となる大学・学会・研修組織の教育体制や実施状況を整理し、支援機器に関する講義・実習の現状を明確化する。

②　ターゲット設定（Target Definition）
・育成すべき人材像（利活用／開発）を明確にし、受講者の専門性・経験・ニーズを可視化する。

③　プログラム内容の議論（Content Design）
・講義・演習・e-learning 等の形式を含め、実施時間と内容の合理性・妥当性を検討する。

④　プログラムの構成案の作成（Curriculum Planning）
・科目構成・講師選定・運営体制など、プログラム全体の構造を設計する。

⑤　プログラム等の評価（Evaluation & Improvement）
・実施後、学習者の成果・満足度・運営面の課題を振り返り、翌年度に向けた改善点を反映する。

人材育成のプログラムの導入指針（案）

① 現状把握（Needs Assessment）
人材育成プログラムの導入にあたり、まず以下の内容を整理する。

1．対象領域の明確化
支援機器に関する当該領域が抱える課題の抽出を行い、それを基に本プログラムが扱う4つの領域のうち、どの領域に重点を置くかを明確にする。目的が「利活用」か「開発」かによって、必要となる専門性や学習内容が変わる。

2．組織の現状把握
養成校・学会・研修機関が既に実施している支援機器関連教育の内容を確認する。（例：義肢装具、日常生活用具、安全性、工学基礎 など）実施可能な講義・演習時間や、既存カリキュラムとの整合性を確認する。

3．運営環境の分析
利用できる講師、設備、予算、教育リソースを整理し、導入に向けた実現可能性（Feasibility）を評価する。必要に応じて、e-learning など柔軟な形式の導入を検討する。

人材育成のプログラムの導入指針（案）

② ターゲット設定（Target Definition）

人材育成プログラムを効果的に設計するためには、まず 「誰を対象に、どの領域の能力を育成するのか」 を明確にすることが重要である。

1. 4つの領域によるターゲット分類

本プログラムでは、以下の4つの領域を対象として設定する。4つの領域（養成校教育 × 利活用、養成校教育 × 開発、生涯教育 × 利活用、生涯教育 × 開発）の対象者の能力などを把握する必要がある。

2. 対象者のレディネス（現状能力）の把握

支援機器に関する知識・技術・経験の現状を把握するアンケート・自己評価・面談などを活用各領域で求められる能力とのギャップを可視化する。

3. 基礎的到達水準の設定

全てのターゲット層に共通して求めるのは、「生活と障害特性の理解に基づき、支援機器の利活用または開発に参画できる基礎力」である。養成校教育から生涯教育まで、学習がシームレスにつながるような設計を行う。

人材育成のプログラムの導入指針（案）

③ プログラムの内容の議論（Content Design）

1. 実施プログラムの明確化

4つの領域の目的に応じて、必要な講義・演習・e-learning モジュールを組み合わせる。受講者のレベル（基礎・初級・中級）に応じて段階的な構成とする。

2. 講師の選定

医療・福祉・工学・産学連携を理解した 領域横断型の講師陣を選定する。養成校教員、臨床専門職、企業技術者、行政担当者など、実践に直結する知見を持つ講師を組み合わせる。

3. ハイブリッド形式の活用

対面授業 × オンライン（e-learning・Zoom） のハイブリッド構造により、受講者に柔軟な受講方法を提供する。限られた時間や地域差に左右されない持続可能な教育設計とする。

4. 運営体制と予算策定

プログラム実施に必要な 講師謝金、教材開発費、運営経費を整理し、予算を見積もる。運営委員会を設置し、授業計画・講師調整・教材作成・評価を統括する。

人材育成のプログラムの導入指針（案）

④プログラムの構成案の作成（Program Planning）

本プログラムの構成は、実施環境・講師体制・教育資源を踏まえ、以下の観点から体系的に設計する。

1. コマ数の設定（Time Allocation）

利用可能な講師数・設備・学内リソースに応じて、無理のないコマ数を設定する。養成校間でコマ数に差が出る場合は、オンデマンド教材や e-learning を活用し、学習機会の均てん化を図る。

2. 科目構成の整理（Curriculum Components）

必須科目（基礎知識・利活用・開発・制度）と、レベル・目的に応じた選択科目を組み合わせ、4つの領域に対応した構造とする。学習レベル（基礎・応用・実践）に応じて、科目の深度を調整する。

3. 講師体制の設計（Instructor Assignment）

●内部講師（養成校・法人内教員）、●外部講師（臨床家・技術者・企業担当者）、●内部外部講師の役割分担

4. 運営体制（Management Structure）

委員会・学会等で講師候補者を抽出し、専門性・教育経験・協働性などの基準で選定する。運営チームは、進行管理・教材準備・フィードバックの回収を担当し、毎年度の改善につなげる。

人材育成のプログラムの導入指針（案）

⑤プログラムの評価（Evaluation）

本プログラムの質を継続的に高めるため、以下の3つの観点から評価・改善を行う。

1. 受講者評価（Learner Feedback）

講義後に簡易アンケート調査を実施し、内容の満足度・理解度・学習ニーズを把握する。
フィードバックをもとに、年間を通じて改善点を明確化する。

2. 教員・講師評価（Instructor Review）

講師・受講者との面談やヒアリングにより、教育内容・指導方法の妥当性を検証する。
1：1で実施することで、具体的な改善点を抽出しやすくなる。

3. 年度ごとの見直し（Annual Revision）

フィードバックをもとに、講義内容・形式（対面／オンライン）・教材構成を見直す。
学内の専門委員会等で検証し、翌年度のプログラム改善に反映する。

支援機器人材育成プログラム導入マニュアル案

1. 目的

本マニュアルは、支援機器人材育成プログラム導入指針に基づき、教育機関および専門職団体が、支援機器開発・利活用に関する人材育成プログラムを効果的に導入するための実践手順（How-to）を示すことを目的とする。

2. 基本方針

本プログラムで示す４つの領域（①養成校×利活用、②養成校×開発、③生涯教育×利活用、④生涯教育×開発）に基づき、対象・目的に応じた内容に即してプログラムを導入する。

・多職種連携の確保：医療・福祉・工学・行政などの関係分野が連携し、各領域の知見を共有しながら教育内容を設計・運営する。

・受講者中心の教育設計：対象者の属性や教育段階（学生、臨床家、開発者等）に応じて柔軟にカリキュラムを構築し、学習成果を最大化する。

・持続可能な運営体制の構築：担当者の継続的な配置、教材の共有化、オンライン学習環境の整備などにより、長期的に運用可能な教育基盤を形成する。

・教育の質保証と改善：実施結果を定期的に評価・検証し、教育内容・方法・体制の改善に反映することで、プログラム全体の質を維持・向上させる。

本マニュアルは、これらの方針に基づき、現状把握から評価・改善に至るまでの具体的手順を提示するものであり、支援機器教育の全国的な普及・定着を促進するための基礎資料として活用できる。なお、本マニュアルは医療職だけでなく、福祉職、工学職を含めて総合的に活用できるマニュアルとする。

3. 導入手順の概要

本プログラムの導入は、各教育機関・領域の特性に応じて柔軟に設計されるが、基本的には「現状把握 → プログラム内容の議論 → プログラム構成案の作成 → プログラムの実施 →プログラムの評価と改善」の『プログラムの実施』を除く５段階を基本手順とする。これにより、導入から定着までを体系的に進めることができる。

さらに、本プログラムでは、教育段階と目的軸の組み合わせによって構成される４つのフェーズ（養成校×利活用、養成校×開発、生涯教育×利活用、生涯教育×開発）を設定しており、各フェーズに応じて導入の重点項目が異なる。

導入手順は下記の５段階を基本としつつ、各教育フェーズにおける教育目的に応じて重点項目を設定する。

① 現状把握（Needs Assessment）
② ターゲット設定（Target Definition）
③ プログラム内容の議論（Content Design）
④ プログラム構成案の作成（Program Planning）
⑤ プログラムの評価（Evaluation）と改善

3-1. 現状把握（Needs Assessment）

本プログラムの導入に先立ち、まず各教育機関・領域における支援機器教育の現状を把握し、既存の教育資源・体制・課題を明確化することが必要である。現状把握は、後続のターゲット設定やプログラム設計の基礎資料となるため、体系的かつ客観的に実施する。各種調査の実践を求める内容だが、現状を把握している有識者で十分検討を行うことも可能とする。

【目的】

・各領域・機関における支援機器教育の位置づけ、内容、実施状況を明らかにする。
・教育資源（人材・教材・機器・施設・連携体制など）の現状を整理し、導入可能な範囲を確認する。
・現場が抱える課題や今後のニーズを把握し、段階的導入の出発点を明確にする。

【方法】

1. 組織の現状を整理

現状把握にあたっては、まず当該領域が抱える支援機器の知識に関する課題を抽出するため、例えば文書調査、関係者ヒアリング、アンケート調査、自己評価シート等を組み合わせて実施する。あわせて、既存の支援機器関連教育（例、補装具、日常生活用具、工学基礎など）の実施状況、確保可能な講義コマ数、教室・設備、ならびに担当教員や外部連携を含む運営体制を整理する。さらに、教員・学生・関係機関を対象とした統一様式のアンケートや半構造化ヒアリングを実施することで現場の声を反映し、導入に向けた課題と実現可能性を客観的に把握することが望ましい。

2. 対象者の分析

・学生（学部生または大学院生）、専門職（経験年数や領域など）
・既習知識・経験・スキル
・支援機器に関する理解度（アンケートまたは自己評価シート）

3. ギャップの特定

・支援機器の開発と利活用に関する知識・技術の目標と現状の差を可視化
・必要な教育内容と補強すべき領域（例えば、医療専門職であれば工学的知識など）を把握

以下に各フェーズの「現状把握」で重視すべき観点を記載する。養成校・生涯教育として支援機器利活用と開発に関わる教育を導入する際には、以下の点を整理する必要がある。これらを参考に各領域の状況をアンケートやヒアリングなどをもとに可視化する。

A）養成校教育×利活用

・支援機器に関する不足している知識・技術・教育体制・設備・教員の専門性の把握
・現行カリキュラムにおける支援機器の利活用に関連する内容の有無
・講義時間の確保可能性、支援機器の実機・教材・動画教材等の保有状況の確認

B）養成校教育×開発

・研究演習（ゼミ・プロジェクト学習）の実施状況の把握
・既存科目での支援機器に関わる課題発見・提案・問題解決型学習（PBL）の有無

・工学的知識を持つ教員の有無、外部技術者・企業との連携可能性（ネットワーク）
・授業設計に必要な設備・実習環境（実験室・機器等）の状況把握

C）生涯教育×利活用

・支援機器に関する不足している知識・技術・経験
・受講者の 学習ニーズ（基礎／実践／応用のどこに課題があるか）
・現行の研修体系や生涯学習コースにおける支援機器の利活用に関連する教育の有無
・研修時間の確保可能性、支援機器の実機・教材の利用環境

D）生涯教育×開発

・開発に関わる専門職の活動の現状把握、企業・行政・大学・医療機関などの多機関連携の状況
・既存の研修プログラム、展示会、共同研究等の機会の把握
・活用・導入できる 研修場面や実習環境（実機・設備等）の状況把握

5-3-2. ターゲット設定（Target Definition）の手順

現状把握の結果をもとに、教育の目標と具体策を決定するため、各教育機関・職能団体における教育対象を明確に定義する。教育目的に応じて、以下の 4 領域からターゲット層を設定する。

A) 養成校教育 × 利活用　機器選定・適用・生活支援を理解する学生向け
B) 養成校教育 × 開発　設計・試作・評価の基本を習得する学生向け
C) 生涯教育 × 利活用　高度な評価・適用・普及まで担う専門職向け
D) 生涯教育 × 開発　臨床知を活かして開発に参画できる実務者向け

-ターゲット設定の留意点-

・各教育機関は、自機関の教育体制・資源に応じて、4 領域すべてを一度に導入する必要はない。各団体に応じたプログラム導入を原則とする。
・できる限りフェーズ間の連続性（例：養成校教育で得た知識が生涯教育に接続する）を意識した設計を行う。
・教育対象の属性や学習背景に応じ、内容の深度と到達目標を調整する。

3-3. プログラム内容（Content Design）の議論の手順

各団体の現状把握およびターゲット設定の結果を踏まえ、支援機器開発・利活用人材育成プログラムを具体的に設計する手順と構成例を示す。設計にあたっては、4 領域（養成校教育×利活用／養成校教育×開発／生涯教育×利活用／生涯教育×開発）を基本枠組みとする。

1. 支援機器開発・利活用の全体フローを理解する（参照：参考資料 1）

各プログラムを設計するのにあたり、支援機器の開発と利活用のフェーズをプログラム設計者は理解し、受講対象となる人が実施する 4 つの領域で、どの段階の知識・技術が不足しているかを明確にする。支援機器の開発と利活用にはニーズ把握 → 評価 → 設計 → 試作 → 適用 → 改善の流れを理解する必要がある。

2. 必要科目の整理

（例）

- 基礎知識（医療・工学）
- 利活用（臨床・生活場面）
- ニーズとシーズのマッチング
- 開発（設計・試作）
- 制度・産学連携（給付制度、事業化など）
- 具体的な支援機器開発と利活用の事例紹介

3. モジュール構成

講義、演習、グループワーク、実習、e-learning の組み合わせを検討する。各ターゲット層に対して、どの科目をコアにするか（必修／選択）を決定する。また、科目数が少ない場合は、必要とする知識や技術が習得できる内容かについて整理する。

・学習到達目標との整合性：教育内容と評価方法を、明確な到達目標（Knowledge／Skill／Collaboration）に基づいて設計する。

・多職種連携と体験的学習の重視：PBL（Project-Based Learning）、実習、ワークショップ等を組み合わせ、実践的・協働的な学びを促す。

・ハイブリッド教育の推進：対面授業とオンライン学習（e-learning・Zoom）を適切に組み合わせ、時間的・地理的制約を超えた受講機会を確保する。

・持続可能な運用設計：担当者・教材・施設の負担を考慮し、既存資源を活かした構造とする。

以下に各フェーズの「プログラム内容の議論」で重視すべき観点を記載する。

A) 養成校教育×利活用

- 支援機器の定義・分類・ICF における位置付け
- 制度的枠組み・給付制度・安全管理の基礎
- 生活場面における利活用の具体例の提示（動画等）
- 実際の支援機器を用いた体験的学習（利用者視点の理解）
- ケースを用いたニーズ評価・選定プロセスの理解

B）養成校教育×開発

・支援機器の開発プロセス（課題抽出 → 概念設計 → 試作 → 改善）
・利用者視点に基づく課題抽出のトレーニング
・実事例・動画教材を用いたグループワークによるアイデア検討
・可能な範囲での簡易試作（紙模型・3D モデル等）
・メーカー・技術者との対話を通じた開発現場の理解

C）生涯教育×利活用

・支援機器の基礎知識・制度の理解、支援機器の導入プロセス（評価 → 選定 → 適合 → モニタリング）
・実機体験（現場で使われる製品を用いた操作・比較）
・ケースディスカッション（利用者の背景・環境・ニーズを踏まえた機器選定）成功例・導入例の共有

D）生涯教育×開発

・支援機器開発の基礎（法制度、安全管理、人間中心設計、開発プロセスの全体像）
・現場からの課題抽出 → アイデア創出 → 試作 → 発表 の一連の流れを体験する演習
・グループワークによる他分野との協働・多職種連携の経験やその体験談
・実事例・現場課題を用いた PBL（問題解決型学習）の導入

5-3-4. プログラム構成案の作成（Program Planning Steps）の手順

①　プログラム目標の設定

支援機器の開発／利活用のどちらを主軸にするか、学習成果（Learning Outcomes）を明確化する。

・各教育フェーズ（養成校教育×利活用／養成校教育×開発／生涯教育×利活用／生涯教育×開発）において、育成すべき人材像と教育の目的を明確にする。

・教育目標は、領域ごとの専門性（例：支援工学理学療法領域、生活支援工学領域など）に応じて設定し、学習段階（基礎・応用・実践）を踏まえて整理する。

・既存カリキュラムや学会等の能力指標との整合を確認し、プログラム全体の位置づけを明確にする。

②　支援機器に関する人材育成のための科目・モジュールの配置

全体フロー（参照：参考資料 1）と科目一覧（参照：参考資料 3,4）を基盤に科目を割り当て、初級 → 中級 → 応用と段階的に配置することも可能である。また、科目数が少なくても支援機器の理解につなげる構成や時間配分とする。

③　講師の選定

内部講師：基礎科目・継続的な講義が可能

外部講師：工学・企業・制度・開発などの応用領域

→多職種協働が生まれるよう意図的に配置する。

④ コマ割り（Time Planning）

学期・研修期間内のコマ数を設定、オンライン教材で不足部分を補完する。

「3-1. 現状把握」で明らかとなった各養成校、職能団体の教育資源や受講者ニーズに応じて、講義、演習、実習、実地研修などの実施形態やコマ数を決定する。

④　運営体制と教材準備

担当者・委員会を設定して、教材を整備する（講義資料、チェックシート、ワークシート）

3-5. プログラムの評価（Evaluation Steps）と改善の手順

1.評価方法の選択（量 × 質）

A. 定量評価　アンケート（Likert 尺度）
知識・技能得点
実践件数・頻度

B. 定性評価　自由記述
半構造化インタビュー
フォーカスグループ

受講生の基本水準への達成度はテストなどを活用して把握可能である。また、受講生からのアンケートなどを活用して、受講生の状態を把握する。研修会のプログラム評価には研修の可視化できるカークパトリックモデルなどを採用し、研修の効果を「反応・学習・行動・結果」の 4 段階で評価を行うことも可能である。

改善点を **① 内容／② 方法／③ 体制** に分類する。図表・マトリクスなどで実施責任者や関係者と共有し、**PDCA サイクル**を回して、改善策を立案する。

2.プログラムの改善案の立案（具体化）

評価結果をもとに、即改善できる点と中長期課題を分けて、プログラムの改善を検討する。

・教材の再構成（動画・事例追加）
・実習比率の調整
・現場課題持ち込み型研修への転換
・修了後フォロー（コミュニティ・メンタリング）

3. プログラムの改善の実装（次サイクルへ）

・外部・第三者視点の導入
・改善内容を次回の講義や研修に反映
・変更点を明文化（記録）
・再評価の指標を設定
⇨ 評価 → 改善 → 再評価を 1 サイクルとして回す

以下に各フェーズの「評価と改善」で重視すべき観点を記載する。

A) 養成校教育×利活用

・授業後アンケートによる理解度・関心度・態度変容の把握
・簡易テストによる知識定着の確認
・教員間での振り返り・ミーティングを行い、改善点を継続的に共有し、教育内容を更新する。

B）養成校教育×開発

成果物の完成度よりも、プロセス重視で行う。
・課題発見力（利用者の困りごとを構造化できるか）
・創造性（多面的な視点からアイデアを生み出す力）

・協働性（議論への貢献、役割分担、コミュニケーション）

＊自己評価・相互評価（Peer Review） の併用、教員・講師によるフィードバックを通じて、学習過程全体を評価する

C）生涯教育×利活用

生涯教育では、理解度だけでなく「臨床への実装可能性」を評価することが重要である。

・研修後アンケートによる理解度・関心度・行動変容の評価

・簡易テストでの知識確認実践報告（短いケース報告・選定プロセスの振り返り）導入実績や現場での成果を含めた実践的指標による評価教員・受講者間のフィードバックを通じた、教育内容の継続的改善

D）生涯教育×開発

開発教育では、成果物の完成度よりも プロセス中心の評価が重要である。

・課題発見力（利用者の困りごとを構造化できたか）

・協働性（多職種・多分野との連携の質）

・創造性（新しい視点や解決策を示せたか）

＊受講者アンケート、成果報告会、開発記録の共有を通じ、教育成果を可視化し、翌年度のプログラムに反映する

参考資料 1 ：支援機器開発・利活用の流れ（プロセス）



支援機器の開発・利活用では、各ステップが連動して進むため、学習者にはプロセス全体を理解した上で、自身の役割や専門性をどこに位置づけるかを意識することが重要である。

参考資料 2：多職種間教育 Interprofessional Education（IPE）の工夫

Level 1：反応（Reaction）
・他職種の視点を理解できたか？
・自分の専門性を説明できたか？
・チームで考える価値を感じたか？
→設問例「他職種の考え方を理解できた」「・・・・・としての役割が明確になった」

Level 2：学習（Learning）「知識」より「役割理解」と「共通言語」
・多職種混成グループでのケース課題
・ロール分担型ワーク
例）理学療法士：身体・動作・生活、工学系：構造・制御、企業：コスト・製造
・ルーブリック評価「自分の役割を説明できる」、「他職種の意見を統合できる」

Level 3：行動（Behavior）IPEの真価が出るレベル
・他職種へ相談した経験
・企業とのミーティング参加
・ニーズ整理役を担った経験
・利用者・企業間の調整行動

Level 4：成果（Results）個人成果 → チーム・社会成果へ
・多職種連携プロジェクトの成立
・試作品・改良案の創出
・開発停滞の解消利用者満足度の向上
【評価方法】
・連携件数・プロジェクト数
・成功事例の質的分析、ネットワーク分析（誰がつないだか）

★出来るだけ多職種で講義や、多職種が参加するワークショップが開催できるように工夫する

参考資料 3：支援機器の開発・利活用に必要な知識や講義内容（コンテンツ）

区分	科目例（抜粋）	主な内容・到達目標
基礎知識（医学・工学）	・支援機器概論（支援機器の定義・目的） ・人体構造と動作の理解 ・工学基礎（材料・制御・安全性）	支援機器の基盤となる医療・工学的知識を習得する
利活用（臨床・生活場面）	・支援機器の適合・選定・評価 ・利用シーン/疾患別の支援機器の種類 ・利活用に向けたアセスメント（ニーズの把握） ・支援機器の利用指導・モニタリングの実践 ・安全な支援機器の利用・リスク管理	利用者の状態と生活ニーズに基づき、適切な機器を選定・適用できる能力を育成
開発（設計・試作）	・開発プロセスの全体像 ・支援機器開発に向けたチームビルディング	開発プロセスを理解し、基礎的な設計思

	・ニーズ調査・ユーザー中心設計 ・アイデア出し、設計・試作、プロトタイプ開発 ・機能評価・モニタリング	考と評価方法を身につける
制度・政策・産学連携	・障害福祉制度 ・給付制度と関連法規 ・産学官連携の基礎 ・特許、医療機器・福祉用具に関わる制度 ・流通・販売、市場分析、事業化・普及戦略	支援機器の普及に不可欠な法制度、連携、事業化の視点を理解する
実例の提示	・支援機器利活用の実例 ・支援機器開発の実例 ・3D プリンターを活用したプロトタイプの試作	実例や実技・演習を通して支援機器の利活用と開発を理解する

これらの科目群は、養成校教育と生涯教育の双方において、支援機器の開発・利活用に必要な基礎から応用までを学ぶために代表的な科目、内容を構成している。しかし、網羅的に科目の配置ができない場合は、これらの内容を含みプログラムを構成することを推奨する。

参考資料 4　支援機器人材育成プログラムの構成例

例 1）　養成校教育×利活用（1 コマ：90 分）

・支援機器の定義、目的と利用シーン/疾患別の支援機器の種類、利活用に向けたアセスメントを実例含めて紹介する。

例 2）　養成校教育×利活用または開発（4 コマ）

開催回	概要	科目・詳細
第1回	利活用の基礎 × 支援機器の全体像	• 支援機器総論(分類・ICF・生活改善) • 障害学・バリアフリーの基礎 • 支給制度(福祉用具・補装具) • 利用者の生活ストーリーを分析(ミニワーク) • 「活用 vs 開発」の違い(概念理解)
第2回	ニーズ収集 × 課題抽出ワーク	• 利用者の動画を見ながらの課題抽出 • 行動観察(どこで・なにが・なぜ困っているか) • ペルソナ(簡易版) • 生活課題→支援機器の関係性を整理 • 「利活用としての解決策」と「開発としての解決策」の比較
第3回	既存機器の評価 × アイデア創出	• 車椅子・歩行補助具・ICTのUX特徴 • なぜ"使いこなせない"のか(ユーザー体験分析) • アイデア創出(グループ？) • 利活用観点：既存機器からの選定 • 開発観点：既存機器の課題から新たな案の提案
第4回	発表	• プレゼン(対象者/課題/案/使い方/改善点) • 相互評価(評価軸：ユーザー視点・実現性・UX) • 利活用提案：既存機器の活用改善案 • 開発提案：新規発想のミニ試作 • (プロトタイプ制作)

例 3）　生涯教育×開発（半日：2 コマ程度）

・支援機器の定義、目的に加えて、給付制度と関連法規、開発プロセスの全体像、ニーズ調査・ユーザー中心設計について講義を行い、最後開発の実例を紹介し、そのときのチームの人員の役割について説明する。

例４） 生涯教育×開発（初級コース）

学修目標

・支援機器開発に関する入門的な知識を習得する。

・支援機器の種類・市場規模を理解する。

・支援機器の支給制度や活用方法について理解する。

・支援機器の一般的な開発プロセスを理解する。

・医工連携が進むように協働の方法を理解する。

学習項目	学習到達目標	
支援機器の基礎	1-1	日常的に使用されている支援機器の種類や機能を理解し、説明できる。 市場規模について理解する。
支援機器の開発プロセスと利活用	2-1	支援機器の開発プロセスの流れを理解し、説明できる。
	2-2	支援機器開発プロセスの各フェーズでの利活用に向けた アイデアを理解し、説明できる。
支援機器の支給制度	3-1	支援機器の支給制度の概要を理解し、説明できる。
ニーズ収集	4-1	ニーズ収集のプロセスを理解し、説明できる
	4-2	ニーズ収集後のニーズステートメントを作成できる。
支援機器のモニター評価	5-1	支援機器の評価方法を理解し、安全性の評価ができる。
	5-2	支援機器の実証実験の手法を理解し、モニター評価ができる。
製品化の事例紹介など	6-1	現在流通している製品の開発成功事例と セラピストの役割を知る。

添付資料 3 :全国専門職養成校学生に対するアンケート調査結果

※自由記述については、原則として回答された文字のまま掲載しております。ただし、個人情報や固有名詞等は削除を行っております。

＃	Q1
設問	あなたの属性を教えてください。(複数の所属がある場合は、比重が最も大きいものを選択してください。)
解答形式	SA

図表 3 -1 所属

	全体	
	n	%
	1812	100.0%
01. 理学療法	319	17.6%
02. 作業療法	855	47.2%
03. 言語聴覚療法	214	11.8%
04. 視能訓練	419	23.1%
05. 視覚障害者歩行（生活）訓練	0	0.0%
06.~09.医学	5	0.3%

所属について、

- 理学療法は 17.6%、作業療法は 47.2%、言語聴覚療法は 11.8%、視能訓練は 23.1%、視覚障害者歩行(生活)訓練では、0.0%、医学は 0.3%だった。
- なお、視覚障害者歩行(生活)訓練については、国内の全学生数が 10 名程度であること、また、そのすべてがアンケート調査実施月に卒業を迎えたため、回答が得られなかった。

＃	Q2
設問	あなたの通っている学校の形態を教えてください。
解答形式	SA

図表 3-2　学校種別

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1812	100.0%	319	100.0%	855	100.0%	214	100.0%	419	100.0%	0	0.0%	5	100.0%
01. 一年制専門学校（昼間部・夜間部）	32	1.8%	0	0.0%	3	0.4%	0	0.0%	29	6.9%	0	0.0%	0	0.0%
02. 二年制専門学校（昼間部・夜間部）	14	0.8%	1	0.3%	2	0.2%	11	5.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
03. 三年制専門学校（昼間部）	557	30.7%	37	11.6%	221	25.8%	17	7.9%	279	66.6%	0	0.0%	3	60.0%
04. 三年制専門学校（夜間部）	31	1.7%	2	0.6%	0	0.0%	0	0.0%	29	6.9%	0	0.0%	0	0.0%
05. 四年制専門学校（昼間部）	183	10.1%	17	5.3%	126	14.7%	37	17.3%	2	0.5%	0	0.0%	1	20.0%
06. 四年制専門学校（夜間部）	15	0.8%	8	2.5%	7	0.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
07. 短期大学	27	1.5%	0	0.0%	9	1.1%	0	0.0%	18	4.3%	0	0.0%	0	0.0%
08. 大学	893	49.3%	222	69.6%	462	54.0%	149	69.6%	60	14.3%	0	0.0%	0	0.0%
09. 大学院	56	3.1%	30	9.4%	23	2.7%	0	0.0%	2	0.5%	0	0.0%	1	20.0%
無回答	4	0.2%	2	0.6%	2	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

学校種別について、

- 全体では、「大学」が 49.3%、「三年制専門学校（昼間部）」が 30.7%、「四年制専門学校（昼間部）」が 10.1%だった。
- 理学療法では、「大学」が 69.6%、「三年制専門学校（昼間部）」が 11.6%、「大学院」が 9.4%だった。
- 作業療法では、「大学」が 54.0%、「三年制専門学校（昼間部）」が 25.8%、「四年制専門学校（昼間部）」が 14.7%だった。
- 言語聴覚療法では、「大学」が 69.6%、「四年制専門学校（昼間部）」が 17.3%、「三年制専門学校（昼間部）」が 7.9%だった。
- 視能訓練では、「三年制専門学校（昼間部）」が 66.6%、「大学」が 14.3%、「一年制専門学校（昼間部・夜間部）」と「三年制専門学校（夜間部）」が 6.9%だった。
- 医学では、「三年制専門学校（昼間部）」が 60.0%、「05. 四年制専門学校（昼間部）」と「大学院」が 20.0%だった。
- ※作業療法では、「二年制専門学校」が存在せず、医師においては「三年制専門学校（昼間部）」が、「05. 四年制専門学校（昼間部）」が存在しない。そのため、回答者の誤回答の可能性あり。

＃	Q3
設問	あなたの学年を教えてください。
解答形式	SA

図表 3-3　学年

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1812	100.0%	319	100.0%	855	100.0%	214	100.0%	419	100.0%	0	0.0%	5	100.0%
01. 一年生	436	24.1%	31	9.7%	194	22.7%	75	35.0%	134	32.0%	0	0.0%	2	40.0%
02. 二年生	459	25.3%	68	21.3%	208	24.3%	63	29.4%	120	28.6%	0	0.0%	0	0.0%
03. 三年生	510	28.1%	64	20.1%	285	33.3%	22	10.3%	138	32.9%	0	0.0%	1	20.0%
04. 四年生	349	19.3%	123	38.6%	146	17.1%	54	25.2%	25	6.0%	0	0.0%	1	20.0%
05. 修士課程	38	2.1%	21	6.6%	14	1.6%	0	0.0%	2	0.5%	0	0.0%	1	20.0%
06. 博士課程	16	0.9%	10	3.1%	6	0.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	4	0.2%	2	0.6%	2	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

学年について、

- 全体では、「三年生」が 28.1%、「二年生」が 25.3%、「一年生」が 24.1%だった。
- 理学療法では、「四年生」が 38.6%、「二年生」が 21.3%、「三年生」が 20.1%だった。
- 作業療法では、「三年生」が 33.3%、「二年生」が 24.3%、「一年生」が 22.7%だった。
- 言語聴覚療法では、「一年生」が 35.0%、「二年生」が 29.4%、「四年生」が 25.2%だった。
- 視能訓練では、「三年生」が 32.9%、「一年生」が 32.0%、「二年生」が 28.6%だった。
- 医学では、「一年生」が 40.0%、「三年生」と「四年生」と「修士課程」が 20.0%だった。

＃	Q4
設問	在籍中もしくは卒業した養成校での授業として、受講した支援機器に関する学習の内容を教えてください。
解答形式	MA

図表 3-4　養成校教育

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1812	100.0%	319	100.0%	855	100.0%	214	100.0%	419	100.0%	0	0.0%	5	100.0%
01. 支援機器の利活用に関する座学	1458	80.5%	254	79.6%	690	80.7%	175	81.8%	337	80.4%	0	0.0%	2	40.0%
02. 支援機器の利活用に関する実習（演習）	951	52.6%	151	47.3%	463	54.2%	94	43.9%	246	58.7%	0	0.0%	0	0.0%
03. 支援機器の開発に関する座学	245	13.5%	57	17.9%	145	17.0%	14	6.5%	29	6.9%	0	0.0%	1	20.0%
04. 支援機器の開発に関する実習（演習）	136	7.5%	16	5.0%	95	11.1%	5	2.3%	20	4.8%	0	0.0%	0	0.0%
05. 支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習	172	9.5%	28	8.8%	104	12.2%	7	3.3%	33	7.9%	0	0.0%	0	0.0%
06. 介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習	183	10.1%	42	13.2%	109	12.7%	7	3.3%	24	5.7%	0	0.0%	1	20.0%
07. 支援機器の開発等に関するコンテストへの参加を通じた学習	22	1.2%	6	1.9%	16	1.9%	0	0.0%	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%
08. 大学の工学系学部等との連携による授業やワークショップを通じた学習	24	1.3%	7	2.2%	15	1.8%	0	0.0%	2	0.5%	0	0.0%	0	0.0%
09. 支援機器開発企業との連携による授業やワークショップを通じた学習	49	2.7%	10	3.1%	26	3.0%	5	2.3%	8	1.9%	0	0.0%	0	0.0%
10. 支援機器に関する学習はしていない	238	13.1%	38	11.9%	101	11.8%	34	15.9%	63	15.0%	0	0.0%	2	40.0%
11. その他	15	0.8%	4	1.3%	9	1.1%	2	0.9%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

自由回答

＜自己学習・展示会などへの参加＞

・　支援機器発表のイベントへの参加

・　展示会への参加

・　資格勉強

＜研究＞

・　研究室での講義

・　支援機器開発を行う研究室での研究補助アルバイト

＜その他＞

・　リハビリテーションに関する授業内で紹介に触れた程度。

・　わからない

養成校教育について、

・　全体では、「支援機器の利活用に関する座学」が 80.5%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 52.6%、「支援機器の開発に関する座学」が 13.5%だった。

・　理学療法では、「支援機器の利活用に関する座学」が 79.6%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 47.3%、「支援機器の開発に関する座学」が 17.9%だった。

・　作業療法では、「支援機器の利活用に関する座学」が 80.7%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 54.2%、「支援機器の開発に関する座学」が 17.0%だった。

・ 言語聴覚療法では、「支援機器の利活用に関する座学」が 81.8%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 43.9%、「支援機器に関する学習はしていない」が 15.9%だった。
・ 視能訓練では、「支援機器の利活用に関する座学」が80.4%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が58.7%、「支援機器に関する学習はしていない」が 15.0%だった。
・ 医学では、「支援機器の利活用に関する座学」と「支援機器に関する学習はしていない」が 40.0%、「支援機器の開発に関する座学」と「介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習」が20.0%だった。

#	Q5
設問	養成校での支援機器に関する学習が、ご自身の支援機器への興味関心や進路選択等にどの程度影響を及ぼしましたか。
解答形式	SA

図表 3-5 養成校教育の影響

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1812	100.0%	319	100.0%	855	100.0%	214	100.0%	419	100.0%	0	0.0%	5	100.0%
01. とても影響があった	350	19.3%	54	16.9%	169	19.8%	40	18.7%	87	20.8%	0	0.0%	0	0.0%
02. まあ影響があった	1031	56.9%	169	53.0%	512	59.9%	112	52.3%	234	55.8%	0	0.0%	4	80.0%
03. あまり影響はなかった	308	17.0%	76	23.8%	128	15.0%	36	16.8%	68	16.2%	0	0.0%	0	0.0%
04. 全く影響はなかった	123	6.8%	20	6.3%	46	5.4%	26	12.1%	30	7.2%	0	0.0%	1	20.0%

養成校教育の影響について、

・ 全体では、「まあ影響があった」が 56.9%、「とても影響があった」が 19.3%、「あまり影響はなかった」が17.0%だった。
・ 理学療法では、「まあ影響があった」が 53.0%、「あまり影響はなかった」が 23.8%、「とても影響があった」が16.9%だった。
・ 作業療法では、「まあ影響があった」が 59.9%、「とても影響があった」が 19.8%、「あまり影響はなかった」が15.0%だった。
・ 言語聴覚療法では、「まあ影響があった」が 52.3%、「とても影響があった」が 18.7%、「あまり影響はなかった」が 16.8%だった。
・ 視能訓練では、「まあ影響があった」が 55.8%、「とても影響があった」が 20.8%、「あまり影響はなかった」が16.2%だった。
・ 医学では、「まあ影響があった」が 80.0%、「全く影響はなかった」が 20.0%だった。

＃	Q6
設問	支援機器の「開発」に対する興味関心の程度を教えてください。
解答形式	SA

図表 3-6　開発への関心

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1812	100.0%	319	100.0%	855	100.0%	214	100.0%	419	100.0%	0	0.0%	5	100.0%
01. とても関心がある	179	9.9%	29	9.1%	102	11.9%	12	5.6%	36	8.6%	0	0.0%	0	0.0%
02. まあ関心がある	801	44.2%	135	42.3%	429	50.2%	79	36.9%	154	36.8%	0	0.0%	4	80.0%
03. あまり関心はない	706	39.0%	136	42.6%	274	32.0%	103	48.1%	192	45.8%	0	0.0%	1	20.0%
04. 全く関心はない	126	7.0%	19	6.0%	50	5.8%	20	9.3%	37	8.8%	0	0.0%	0	0.0%

開発への関心について、

- 全体では、「まあ関心がある」が 44.2%、「あまり関心はない」が 39.0%、「とても関心がある」が 9.9%だった。
- 理学療法では、「あまり関心はない」が 42.6%、「まあ関心がある」が 42.3%、「とても関心がある」が 9.1%だった。
- 作業療法では、「まあ関心がある」が 50.2%、「あまり関心はない」が 32.0%、「とても関心がある」が 11.9%だった。
- 言語聴覚療法では、「あまり関心はない」が 48.1%、「まあ関心がある」が 36.9%、「全く関心はない」が 9.3%だった。
- 視能訓練では、「あまり関心はない」が 45.8%、「まあ関心がある」が 36.8%、「全く関心はない」が 8.8%だった。
- 医学では、「まあ関心がある」が 80.0%、「あまり関心はない」が 20.0%だった。

＃	Q7-1
設問	（Q6 で「01. とても関心がある」、「02. まあ関心がある」を選択した場合）支援機器の開発に関心をもったきっかけを教えてください。
解答形式	MA

図表 3-7　開発に関心を持ったきっかけ

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	980	100.0%	164	100.0%	531	100.0%	91	100.0%	190	100.0%	0	0.0%	4	100.0%
01. 養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった	560	57.1%	86	52.4%	294	55.4%	55	60.4%	123	64.7%	0	0.0%	2	50.0%
02. 養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった	287	29.3%	38	23.2%	164	30.9%	25	27.5%	60	31.6%	0	0.0%	0	0.0%
03. 臨床実習をきっかけに興味をもった	239	24.4%	52	31.7%	129	24.3%	23	25.3%	35	18.4%	0	0.0%	0	0.0%
04. 卒業研究をきっかけに興味をもった	29	3.0%	8	4.9%	14	2.6%	2	2.2%	5	2.6%	0	0.0%	0	0.0%
05. 養成校の自主学習（サークルや課外活動等）をきっかけに興味をもった	26	2.7%	4	2.4%	15	2.8%	2	2.2%	5	2.6%	0	0.0%	0	0.0%
06. 生涯教育（座学形式の研修・セミナー）をきっかけに興味をもった	20	2.0%	5	3.0%	8	1.5%	0	0.0%	7	3.7%	0	0.0%	0	0.0%
07. 生涯教育（演習形式の研修・セミナー）をきっかけに興味をもった	15	1.5%	4	2.4%	5	0.9%	0	0.0%	6	3.2%	0	0.0%	0	0.0%
08. 臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった	86	8.8%	25	15.2%	45	8.5%	7	7.7%	8	4.2%	0	0.0%	1	25.0%
09. 支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった	108	11.0%	26	15.9%	65	12.2%	5	5.5%	11	5.8%	0	0.0%	1	25.0%
10.介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学をきっかけに興味をもった	34	3.5%	6	3.7%	21	4.0%	2	2.2%	5	2.6%	0	0.0%	0	0.0%
11. その他	41	4.5%	7	4.3%	24	4.5%	9	9.9%	4	2.1%	0	0.0%	0	0.0%

自由回答

＜個人的経験・周囲の影響＞

・　身近な人に障害者がいるから。支援機器を利用していたから。
・　身近な人に支援機器の開発を行っている人がいるから
・　身近な人が必要になったため。
・　開発している人の話を伺って興味を持った
・　教員からの声掛け
・　自身の入院経験
・　親から聞いた事があったから
・　特別支援学級の担任を長くしていたから。

＜自己学習・課外活動・イベントへの参加＞

・　介護の勉強をしている時に参考書などで支援機器を見て興味を持った
・　オープンキャンパス
・　ボランティア

＜臨床現場＞

・　臨床現場の見学
・　視覚障害者支援機関、視覚支援学校への見学

＜技術・分野への興味＞

・　パラスポーツへの関わりに興味がある
・　自助具や医療機器に興味があった影響で支援機器にも関心あり
・　もともとものづくりや工学部に興味があったから。

＜研究＞
・　大学院での企業との共同研究
・　リハビリとロボットの学会への参加
・　支援機器開発を行っている研究室でのアルバイト経験

＜メディア＞
・　インターネット
・　テレビ

＜その他＞
・　小学生の頃に読んだ本の影響
・　進路を決める過程で興味を持った
・　高校で授業があった
・　特になし
・　わからない

開発に関心を持ったきっかけについて、

・　全体では、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 57.1%、「養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 29.3%、「臨床実習をきっかけに興味をもった」が 24.4%だった。
・　理学療法では、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 52.4%、「臨床実習をきっかけに興味をもった」が 31.7%、「養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 23.2%だった。
・　作業療法では、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 55.4%、「養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 30.9%、「臨床実習をきっかけに興味をもった」が 24.3%だった。
・　言語聴覚療法では、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 60.4%、「養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 27.5%、「 臨床実習をきっかけに興味をもった」が 25.3%だった。
・　視能訓練では、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 64.7%、「養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 31.6%、「臨床実習をきっかけに興味をもった」が 18.4%だった。
・　医学では、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 50.0%、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」と「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 25.0%だった。

＃	Q7-2
設問	(Q6 で「03. あまり関心はない」、「04. 全く関心はない」を選択した場合)どのようなきっかけがあれば、支援機器の開発に関心を持つことができそうですか。
解答形式	MA

図表 3-8　開発に関心をもつために必要なきっかけ

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行(生活)訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	832	100.0%	155	100.0%	324	100.0%	123	100.0%	229	100.0%	0	0.0%	1	100.0%
01. 養成校教育(座学形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる	200	24.0%	27	17.4%	76	23.5%	33	26.8%	64	27.9%	0	0.0%	0	0.0%
02. 養成校教育(演習形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる	253	30.4%	41	26.5%	109	33.6%	44	35.8%	59	25.8%	0	0.0%	0	0.0%
03. 臨床実習で支援機器を実際に活用する	363	43.6%	72	46.5%	148	45.7%	59	48.0%	83	36.2%	0	0.0%	1	100.0%
04. 卒業研究で支援機器をテーマに取り上げる	92	11.1%	24	15.5%	38	11.7%	13	10.6%	17	7.4%	0	0.0%	0	0.0%
05. 養成校の自主学習(サークルや課外活動等)で支援機器に関する活動を行う	37	4.4%	9	5.8%	14	4.3%	6	4.9%	8	3.5%	0	0.0%	0	0.0%
06. 生涯教育(座学形式の研修・セミナー)で支援機器に関する内容を取り上げる	36	4.3%	8	5.2%	14	4.3%	3	2.4%	11	4.8%	0	0.0%	0	0.0%
07. 生涯教育(演習形式の研修・セミナー)で支援機器に関する内容を取り上げる	37	4.4%	10	6.5%	15	4.6%	6	4.9%	6	2.6%	0	0.0%	0	0.0%
08. 臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する	252	30.3%	65	41.9%	99	30.6%	47	38.2%	41	17.9%	0	0.0%	0	0.0%
09. 支援機器に関連する学会・展示会に参加する	116	13.9%	27	17.4%	49	15.1%	26	21.1%	14	6.1%	0	0.0%	0	0.0%
10. 介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場へ見学に行く	89	10.7%	10	6.5%	45	13.9%	13	10.6%	21	9.2%	0	0.0%	0	0.0%
11. その他	8	1.0%	1	0.6%	4	1.2%	1	0.8%	2	0.9%	0	0.0%	0	0.0%

自由回答

＜技術・分野への興味＞

・　工業への知識、技術

・　何かを作ることが苦手なので興味は湧かないと思う

＜その他＞

・　カリキュラムに組み込む。

・　特になし

・　わからない

開発に関心をもつために必要なきっかけについて、

・　全体では、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 43.6%、「養成校教育(演習形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる」が 30.4%、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 30.3%だった。

・　理学療法では、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 46.5%、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 41.9%、「養成校教育(演習形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる」が 26.5%だった。

・　作業療法では、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 45.7%、「養成校教育(演習形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる」が 33.6%、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等

を担当する」が 30.6%だった。

- 言語聴覚療法では、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 48.0%、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 38.2%、「養成校教育（演習形式の授業）で支援機器に関する内容を取り上げる」が 35.8%だった。
- 視能訓練では、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 36.2%、「養成校教育（座学形式の授業）で支援機器に関する内容を取り上げる」が 27.9%、「養成校教育（演習形式の授業）で支援機器に関する内容を取り上げる」が 25.8%だった。
- 医学では、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 100%だった。

＃	Q8
設問	支援機器の「利活用」に対する興味関心の程度を教えてください。
解答形式	SA

図表 3-9　利活用への関心

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1813	100.0%	319	100.0%	855	100.0%	214	100.0%	419	100.0%	0	0.0%	5	100.0%
01. とても関心がある	286	15.8%	53	16.6%	154	18.0%	34	15.9%	45	10.7%	0	0.0%	0	0.0%
02. まあ関心がある	1054	58.1%	175	54.9%	523	61.2%	123	57.5%	228	54.4%	0	0.0%	5	100.0%
03. あまり関心はない	424	23.4%	85	26.6%	163	19.1%	49	22.9%	127	30.3%	0	0.0%	0	0.0%
04. 全く関心はない	48	2.6%	6	1.9%	15	1.8%	8	3.7%	19	4.5%	0	0.0%	0	0.0%

利活用への関心について、

- 全体では、「まあ関心がある」が 58.1%、「あまり関心はない」が 23.4%、「とても関心がある」が 15.8%だった。
- 理学療法では、「まあ関心がある」が 54.9%、「あまり関心はない」が 26.6%、「とても関心がある」が 16.6%だった。
- 作業療法では、「まあ関心がある」が 61.2%、「あまり関心はない」が 19.1%、「とても関心がある」が 18.0%だった。
- 言語聴覚療法では、「まあ関心がある」が 57.5%、「あまり関心はない」が 22.9%、「とても関心がある」が 15.9%だった。
- 視能訓練では、「まあ関心がある」が 54.4%、「あまり関心はない」が 30.3%、「とても関心がある」が 10.7%だった。
- 医学では、「まあ関心がある」が 100%だった。

＃	Q9-1
設問	（Q8 で「01. とても関心がある」、「02. まあ関心がある」を選択した場合）支援機器の利活用に関心をもったきっかけを教えてください。
解答形式	MA

図表 3-10 利活用に関心をもったきっかけ

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1340	100.0%	228	100.0%	677	100.0%	157	100.0%	273	100.0%	0	0.0%	5	100.0%
01. 養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった	807	60.2%	116	50.9%	404	59.7%	107	68.2%	179	65.6%	0	0.0%	1	20.0%
02. 養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった	448	33.4%	66	28.9%	228	33.7%	56	35.7%	98	35.9%	0	0.0%	0	0.0%
03. 臨床実習をきっかけに興味をもった	347	25.9%	87	38.2%	175	25.8%	32	20.4%	52	19.0%	0	0.0%	1	20.0%
04. 卒業研究をきっかけに興味をもった	32	2.4%	8	3.5%	16	2.4%	2	1.3%	6	2.2%	0	0.0%	0	0.0%
05. 養成校の自主学習（サークルや課外活動等）をきっかけに興味をもった	37	2.8%	7	3.1%	18	2.7%	4	2.5%	8	2.9%	0	0.0%	0	0.0%
06. 生涯教育（座学形式の研修・セミナー）をきっかけに興味をもった	26	1.9%	3	1.3%	12	1.8%	4	2.5%	7	2.6%	0	0.0%	0	0.0%
07. 生涯教育（演習形式の研修・セミナー）をきっかけに興味をもった	14	1.0%	2	0.9%	5	0.7%	2	1.3%	5	1.8%	0	0.0%	0	0.0%
08. 臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった	111	8.3%	33	14.5%	56	8.3%	8	5.1%	12	4.4%	0	0.0%	2	40.0%
09. 支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった	116	8.7%	30	13.2%	69	10.2%	7	4.5%	9	3.3%	0	0.0%	1	20.0%
10.介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学をきっかけに興味をもった	45	3.4%	7	3.1%	31	4.6%	2	1.3%	5	1.8%	0	0.0%	0	0.0%
11. その他	22	1.6%	2	0.9%	13	1.9%	7	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

自由回答

＜個人的経験・周囲の影響＞

- 兄が工学部の大学院で義手の開発研究をしているから。
- 家族が利用しているため
- 自身が入院した際
- 退職前の仕事柄、常に興味があった。
- 今後いずれかは利用する機会があると考えているため
- 周りに障害を持つ人が比較的多い環境で育ったので興味を持った
- 祖父母の生活状況を見て、支援機器が活用できたらよりよい生活になると思ったから。

＜自己学習・課外活動・イベントなどへの参加＞

- 学生時代に福祉機器の展示会でアルバイトをした
- ボランティアに参加したのをきっかけに興味をもった
- 支援機器開発を行っている研究室でのアルバイト経験

＜臨床現場＞

- 今後のために
- 機器を使うことが出来るとより良い生活が送れる場合もあるから
- 臨床現場での見学

＜技術・分野への興味＞

・　元から興味があった

＜その他＞

・　小学生の頃に読んだ本

利活用に関心をもつために必要なきっかけについて、

・　全体では、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 60.2%、「養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 33.4%、「臨床実習をきっかけに興味をもった」が 25.9%だった。

・　理学療法では、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 50.9%、「臨床実習をきっかけに興味をもった」が 38.2%、「養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 28.9%だった。

・　作業療法では、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 59.7%、「養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 33.7%、「臨床実習をきっかけに興味をもった」が 25.8%だった。

・　言語聴覚療法では、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 68.2%、「養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 35.7%、「臨床実習をきっかけに興味をもった」が 20.4%だった。

・　視能訓練では、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 65.6%、「養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 35.9%、「臨床実習をきっかけに興味をもった」が 19.0%だった。

・　医学では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 40.0%、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」と「臨床実習をきっかけに興味をもった」と「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 20.0%だった。

＃	Q9-2
設問	(Q8 で「03. あまり関心はない」、「04. 全く関心はない」を選択した場合)どのようなきっかけがあれば、支援機器の利活用に関心を持つことができそうですか。
解答形式	MA

図表 3-11 利活用に関心をもつために必要なきっかけ

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行(生活)訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	472	100.0%	91	100.0%	178	100.0%	57	100.0%	146	100.0%	0	0.0%	0	0.0%
01. 養成校教育(座学形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる	155	32.8%	18	19.8%	63	35.4%	27	47.4%	47	32.2%	0	0.0%	0	0.0%
02. 養成校教育(演習形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる	151	32.0%	29	31.9%	66	37.1%	20	35.1%	36	24.7%	0	0.0%	0	0.0%
03. 臨床実習で支援機器を実際に活用する	160	33.9%	37	40.7%	61	34.3%	22	38.6%	40	27.4%	0	0.0%	0	0.0%
04. 卒業研究で支援機器をテーマに取り上げる	32	6.8%	4	4.4%	15	8.4%	3	5.3%	10	6.8%	0	0.0%	0	0.0%
05. 養成校の自主学習(サークルや課外活動等)で支援機器に関する活動を行う	14	3.0%	3	3.3%	4	2.2%	3	5.3%	4	2.7%	0	0.0%	0	0.0%
06. 生涯教育(座学形式の研修・セミナー)で支援機器に関する内容を取り上げる	14	3.0%	2	2.2%	2	1.1%	0	0.0%	10	6.8%	0	0.0%	0	0.0%
07. 生涯教育(演習形式の研修・セミナー)で支援機器に関する内容を取り上げる	18	3.8%	5	5.5%	4	2.2%	3	5.3%	6	4.1%	0	0.0%	0	0.0%
08. 臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する	101	21.4%	33	36.3%	29	16.3%	17	29.8%	22	15.1%	0	0.0%	0	0.0%
09. 支援機器に関連する学会・展示会に参加する	48	10.2%	6	6.6%	17	9.6%	12	21.1%	13	8.9%	0	0.0%	0	0.0%
10.介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場へ見学に行く	43	9.1%	9	9.9%	15	8.4%	3	5.3%	16	11.0%	0	0.0%	0	0.0%
11. その他	7	1.5%	0	0.0%	4	2.2%	0	0.0%	3	2.1%	0	0.0%	0	0.0%

自由回答

＜その他＞

- 特になし
- わからない

利活用に関心をもつために必要なきっかけについて、

- 全体では、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 33.9%、「養成校教育(座学形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる」が 32.8%、「養成校教育(演習形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる」が 32.0%だった。
- 理学療法では、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 40.7%、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 36.3%、「養成校教育(演習形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる」が 31.9%だった。
- 作業療法では、「養成校教育(演習形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる」が 37.1%、「養成校教育(座学形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる」が 35.4%、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 34.3%だった。
- 言語聴覚療法では、「養成校教育(座学形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる」が 47.4%、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 38.6%、「養成校教育(演習形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる」が 35.1%だった。

・ 視能訓練では、「養成校教育（座学形式の授業）で支援機器に関する内容を取り上げる」が 32.2%、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 27.4%、「養成校教育（演習形式の授業）で支援機器に関する内容を取り上げる」が 24.7%だった。

＃	Q10
設問	支援機器に関する授業・研修・セミナー等があれば受講してみたいと思いますか。
解答形式	SA

図表 3-12 支援機器教育に対する今後の受講希望

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1813	100.0%	319	100.0%	855	100.0%	214	100.0%	419	100.0%	0	0.0%	5	100.0%
01. とても受講したい	208	11.5%	38	11.9%	115	13.5%	33	15.4%	22	5.3%	0	0.0%	0	0.0%
02. まあ受講したい	1235	68.1%	219	68.7%	601	70.3%	153	71.5%	257	61.3%	0	0.0%	5	100.0%
03. あまり受講したくない	311	17.2%	53	16.6%	116	13.6%	22	10.3%	120	28.6%	0	0.0%	0	0.0%
04. 受講したくない	58	3.2%	9	2.8%	23	2.7%	6	2.8%	20	4.8%	0	0.0%	0	0.0%

支援機器教育に対する今後の受講希望について、

・ 全体では、「まあ受講したい」が 68.1%、「あまり受講したくない」が 17.2%、「とても受講したい」が 11.5%だった。
・ 理学療法では、「まあ受講したい」が 68.7%、「あまり受講したくない」が 16.6%、「とても受講したい」が 11.9%だった。
・ 作業療法では、「まあ受講したい」が 70.3%、「あまり受講したくない」が 13.6%、「とても受講したい」が 13.5%だった。
・ 言語聴覚療法では、「まあ受講したい」が 71.5%、「とても受講したい」が 15.4%、「あまり受講したくない」が 10.3%だった。
・ 視能訓練では、「まあ受講したい」が 61.3%、「あまり受講したくない」が 28.6%、「とても受講したい」が 5.3%だった。
・ 医学では、「まあ受講したい」が 100%だった。

＃	Q11
設問	支援機器に関する授業・研修・セミナー等はどのような内容であれば受講してみたいと思いますか。
解答形式	MA

図表 3-13 受講したい内容

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1813	100.0%	319	100.0%	855	100.0%	214	100.0%	419	100.0%	0	0.0%	5	100.0%
01. 支援機器の利活用に関する座学	728	40.2%	121	37.9%	314	36.7%	101	47.2%	192	45.8%	0	0.0%	0	0.0%
02. 支援機器の利活用に関する実習（演習）	1103	60.8%	185	58.0%	561	65.6%	131	61.2%	224	53.5%	0	0.0%	2	40.0%
03. 支援機器の開発に関する座学	365	20.1%	60	18.8%	202	23.6%	45	21.0%	58	13.8%	0	0.0%	0	0.0%
04. 支援機器の開発に関する実習（演習）	428	23.6%	90	28.2%	233	27.3%	45	21.0%	59	14.1%	0	0.0%	1	20.0%
05. 支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習	256	14.1%	48	15.0%	145	17.0%	29	13.6%	33	7.9%	0	0.0%	1	20.0%
06. 介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習	258	14.2%	44	13.8%	155	18.1%	23	10.7%	34	8.1%	0	0.0%	2	40.0%
07. 支援機器の開発等に関するコンテストへの参加を通じた学習	91	5.0%	19	6.0%	52	6.1%	5	2.3%	14	3.3%	0	0.0%	1	20.0%
08. 大学の工学系学部等との連携による授業やワークショップを通じた学習	238	13.1%	46	14.4%	131	15.3%	31	14.5%	30	7.2%	0	0.0%	0	0.0%
09. 支援機器開発企業との連携による授業やワークショップを通じた学習	252	13.9%	40	12.5%	146	17.1%	30	14.0%	35	8.4%	0	0.0%	1	20.0%
10. その他	8	0.4%	0	0.0%	5	0.6%	2	0.9%	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%

自由回答

＜臨床に即した経験＞

・　実際に利用する感覚が学習できるような体験会。

・　授業の一環で実技

＜障害当事者による講義＞

・　使用者による講和

＜その他＞

・　わからない

受講したい内容について、

・　全体では、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 60.8%、「支援機器の利活用に関する座学」が 40.2%、「支援機器の開発に関する実習（演習）」が 23.6%だった。

・　理学療法では、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 58.0%、「支援機器の利活用に関する座学」が 37.9%、「支援機器の開発に関する実習（演習）」が 28.2%だった。

・　作業療法では、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 65.6%、「支援機器の利活用に関する座学」が 36.7%、「支援機器の開発に関する実習（演習）」が 27.3%だった。

・　言語聴覚療法では、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 61.2%、「支援機器の利活用に関する座学」が 47.2%、「支援機器の開発に関する座学」と「支援機器の開発に関する実習（演習）」が 21.0%だった。

・　視能訓練では、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 53.5%、「支援機器の利活用に関する座学」が

45.8%、「支援機器の開発に関する実習（演習）」が 14.1%だった。

・ 医学では、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」と「介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習」が 40.0%、「支援機器の開発に関する実習（演習）」と「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」と「支援機器の開発等に関するコンテストへの参加を通じた学習」が 20.0%だった。

＃	学年分類×Q4
設問	在籍中もしくは卒業した養成校での授業として、受講した支援機器に関する学習の内容を教えてください。
解答形式	MA

図表 3-14 学年分類×養成校教育

	全体		一年生		二年生		三年生		四年生		修士課程		博士課程		無回答	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1812	100.0%	436	100.0%	459	100.0%	510	100.0%	349	100.0%	38	100.0%	16	100.0%	4	100.0%
01. 支援機器の利活用に関する座学	1458	80.5%	281	64.4%	367	80.0%	445	87.3%	319	91.4%	30	78.9%	14	87.5%	2	50.0%
02. 支援機器の利活用に関する実習（演習）	954	52.6%	175	40.1%	210	45.8%	318	62.4%	223	63.9%	18	47.4%	9	56.3%	1	25.0%
03. 支援機器の開発に関する座学	245	13.5%	35	8.0%	55	12.0%	88	17.3%	58	16.6%	6	15.8%	2	12.5%	1	25.0%
04. 支援機器の開発に関する実習（演習）	136	7.5%	17	3.9%	21	4.6%	60	11.8%	36	10.3%	1	2.6%	0	0.0%	1	25.0%
05. 支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習	172	9.5%	25	5.7%	49	10.7%	52	10.2%	39	11.2%	5	13.2%	0	0.0%	2	50.0%
06. 介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習	183	10.1%	19	4.4%	58	12.6%	63	12.4%	40	11.5%	1	2.6%	2	12.5%	0	0.0%
07. 支援機器の開発等に関するコンテストへの参加を通じた学習	22	1.2%	1	0.2%	8	1.7%	8	1.6%	5	1.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
08. 大学の工学系学部等との連携による授業やワークショップを通じた学習	24	1.3%	2	0.5%	4	0.9%	7	1.4%	8	2.3%	3	7.9%	0	0.0%	0	0.0%
09. 支援機器開発企業との連携による授業やワークショップを通じた学習	49	2.7%	6	1.4%	10	2.2%	15	2.9%	17	4.9%	1	2.6%	0	0.0%	0	0.0%
10. 支援機器に関する学習はしていない	238	13.1%	119	27.3%	58	12.6%	39	7.6%	17	4.9%	4	10.5%	0	0.0%	1	25.0%
11. その他	15	0.8%	4	0.9%	4	0.9%	3	0.6%	3	0.9%	0	0.0%	0	0.0%	1	25.0%

養成校教育について、

・ 全体では、「支援機器の利活用に関する座学」が 80.5%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 52.6%、「支援機器の開発に関する座学」が 13.5%だった。

・ 一年生では、「支援機器の利活用に関する座学」が 64.4%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 40.1%、「支援機器に関する学習はしていない」が 27.3%だった。

・ 二年生では、「支援機器の利活用に関する座学」が 80.0%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 45.8%、「介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習」と「支援機器に関する学習はしていない」が 12.6%だった。

・ 三年生では、「支援機器の利活用に関する座学」が 87.3%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 62.4%、「支援機器の開発に関する座学」が 17.3%だった。

・ 四年生では、「支援機器の利活用に関する座学」が 91.4%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 63.9%、「支援機器の開発に関する座学」が 16.6%だった。

・ 修士課程では、「支援機器の利活用に関する座学」が78.9%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が47.4%、「支援機器の開発に関する座学」が 15.8%だった。
・ 博士課程では、「支援機器の利活用に関する座学」が87.5%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が56.3%、「支援機器の開発に関する座学」と「介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習」が 12.5%だった。

＃	学年分類×Q6
設問	支援機器の「開発」に対する興味関心の程度を教えてください。
解答形式	SA

図表 3-15 学年分類×開発への関心

	全体		一年生		二年生		三年生		四年生		修士課程		博士課程		無回答	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1812	100.0%	436	100.0%	459	100.0%	510	100.0%	349	100.0%	38	100.0%	16	100.0%	4	100.0%
01. とても関心がある	179	9.9%	55	12.6%	38	8.3%	45	8.8%	28	8.0%	9	23.7%	3	18.8%	1	25.0%
02. まあ関心がある	801	44.2%	193	44.3%	200	43.6%	225	44.1%	158	45.3%	14	36.8%	9	56.3%	2	50.0%
03. あまり関心はない	706	39.0%	159	36.5%	197	42.9%	190	37.3%	143	41.0%	12	31.6%	4	25.0%	1	25.0%
04. 全く関心はない	126	7.0%	29	6.7%	24	5.2%	50	9.8%	20	5.7%	3	7.9%	0	0.0%	0	0.0%

開発への関心について、

・ 全体では、「まあ関心がある」が 44.2%、「あまり関心はない」が 39.0%、「とても関心がある」が 9.9%だった。
・ 一年生では、「まあ関心がある」が 44.3%、「あまり関心はない」が 36.5%、「とても関心がある」が 12.6%だった。
・ 二年生では、「まあ関心がある」が 43.6%、「あまり関心はない」が 42.9%、「とても関心がある」が 8.3%だった。
・ 三年生では、「まあ関心がある」が44.1%、「あまり関心はない」が37.3%、「全く関心はない」が9.8%だった。
・ 四年生では、「まあ関心がある」が 45.3%、「あまり関心はない」が 41.0%、「とても関心がある」が 8.0%だった。
・ 修士課程では、「まあ関心がある」が 36.8%、「あまり関心はない」が 31.6%、「とても関心がある」が 23.7%だった。
・ 博士課程では、「まあ関心がある」が 56.3%、「あまり関心はない」が 25.0%、「とても関心がある」が 18.8%だった。

＃	学年分類×Q8
設問	支援機器の「利活用」に対する興味関心の程度を教えてください。
解答形式	SA

図表 3-16 学年分類×利活用への関心

	全体		一年生		二年生		三年生		四年生		修士課程		博士課程		無回答	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1812	100.0%	436	100.0%	459	100.0%	510	100.0%	349	100.0%	38	100.0%	16	100.0%	4	100.0%
01. とても関心がある	286	15.8%	73	16.7%	64	13.9%	77	15.1%	58	16.6%	10	26.3%	3	18.8%	1	25.0%
02. まあ関心がある	1054	58.2%	244	56.0%	272	59.3%	299	58.6%	210	60.2%	18	47.4%	9	56.3%	2	50.0%
03. あまり関心はない	424	23.4%	104	23.9%	115	25.1%	114	22.4%	77	22.1%	9	23.7%	4	25.0%	1	25.0%
04. 全く関心はない	48	2.6%	15	3.4%	8	1.7%	20	3.9%	4	1.1%	1	2.6%	0	0.0%	0	0.0%

利活用への関心について、

- 全体では、「まあ関心がある」が 58.1%、「あまり関心はない」が 23.4%、「とても関心がある」が 15.8%だった。
- 一年生では、「まあ関心がある」が 56.0%、「あまり関心はない」が 23.9%、「とても関心がある」が 16.7%だった。
- 二年生では、「まあ関心がある」が 59.3%、「あまり関心はない」が 25.1%、「とても関心がある」が 13.9%だった。
- 三年生では、「まあ関心がある」が 58.6%、「あまり関心はない」が 22.4%、「とても関心がある」が 15.1%だった。
- 四年生では、「まあ関心がある」が 60.2%、「あまり関心はない」が 22.1%、「とても関心がある」が 16.6%だった。
- 修士課程では、「まあ関心がある」が 47.4%、「とても関心がある」が 26.3%、「あまり関心はない」が 23.7%だった。
- 博士課程では、「まあ関心がある」が 56.3%、「あまり関心はない」が 25.0%、「とても関心がある」が 18.8%だった。

＃	学年分類×Q10
設問	支援機器に関する授業・研修・セミナー等があれば受講してみたいと思いますか。
解答形式	SA

図表 3-17 学年分類×支援機器教育に対する今後の受講希望

	全体		一年生		二年生		三年生		四年生		修士課程		博士課程		無回答	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1812	100.0%	436	100.0%	459	100.0%	510	100.0%	349	100.0%	38	100.0%	16	100.0%	4	100.0%
01. とても受講したい	208	11.5%	54	12.4%	41	8.9%	54	10.6%	45	12.9%	10	26.3%	3	18.8%	1	25.0%
02. まあ受講したい	1235	68.2%	289	66.3%	313	68.2%	338	66.3%	262	75.1%	22	57.9%	9	56.3%	2	50.0%
03. あまり受講したくない	311	17.2%	76	17.4%	97	21.1%	91	17.8%	39	11.2%	4	10.5%	4	25.0%	0	0.0%
04. 受講したくない	58	3.2%	17	3.9%	8	1.7%	27	5.3%	3	0.9%	2	5.3%	0	0.0%	1	25.0%

支援機器教育に対する今後の受講希望について、

- 全体では、「まあ受講したい」が 68.2%、「あまり受講したくない」が 17.2%、「とても受講したい」が 11.5%だった。
- 一年生では、「まあ受講したい」が 66.3%、「あまり受講したくない」が 17.4%、「とても受講したい」が 12.4%だった。
- 二年生では、「まあ受講したい」が 68.2%、「あまり受講したくない」が 21.1%、「とても受講したい」が 8.9%だった。
- 三年生では、「まあ受講したい」が 66.3%、「あまり受講したくない」が 17.8%、「とても受講したい」が 10.6%だった。
- 四年生では、「まあ受講したい」が 75.1%、「とても受講したい」が 12.9%、「あまり受講したくない」が 11.2%だった。
- 修士課程では、「まあ受講したい」が 57.9%、「とても受講したい」が 26.3%、「あまり受講したくない」が 10.5%だった。
- 博士課程では、「まあ受講したい」が 56.3%、「あまり受講したくない」が 25.0%、「とても受講したい」が 18.8%だった。

添付資料4：全国の専門職として現役で働く人材に対するアンケート調査結果

※自由記述については、原則として回答された文字のまま掲載しております。ただし、個人情報や固有名詞等は削除を行っております。

＃	Q1
設問	あなたの属性を教えてください。（複数の所属がある場合は、比重が最も大きいものを選択してください。）
解答形式	SA

図表 4-1 所属

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5152	100.0%	532	100.0%	3624	100.0%	71	100.0%	770	100.0%	81	100.0%	54	100.0%
02. 医療・介護従事者	4331	84.1%	412	77.4%	3135	86.5%	55	77.5%	665	86.4%	22	27.2%	32	59.3%
03. 教員・研究者（大学・専門学校、研究機関等）	563	10.9%	109	20.5%	313	8.6%	13	18.3%	78	10.1%	27	33.3%	20	37.0%
04. 民間企業勤務（支援機器開発・販売等に関連する企業）	15	0.3%	1	0.2%	8	0.2%	1	1.4%	0	0.0%	4	4.9%	0	0.0%
05. 民間企業勤務（支援機器開発・販売等に関連しない企業）	120	2.3%	8	1.5%	87	2.4%	0	0.0%	14	1.8%	9	11.1%	1	1.9%
06. 官公庁職員	65	1.3%	2	0.4%	47	1.3%	0	0.0%	7	0.9%	5	6.2%	1	1.9%
07. その他	58	1.1%	0	0.0%	34	0.9%	2	2.8%	6	0.8%	14	17.3%	0	0.0%

自由回答

＜医療機関＞

・ 眼科

＜障害福祉関連施設＞

・ 社協職員
・ 障害者支援事業
・ 介護実習普及センター
・ 支援施設運営法人職員
・ 社会福祉法人職員
・ 障害福祉施設

＜教育機関＞

・ 認定こども園
・ 支援学校教員
・ 大学教員

＜行政＞

・ 行政職員
・ 会計年度任用職員
・ 大学教員
・ 独立行政法人

＜民間・団体＞

・ 会社経営
・ NPO 法人、公益社団法人

・　職能団体職員
・　視覚障害者を支援するNPO職員（相談員）
・　障害者団体職員
・　盲導犬育成施設・団体
・　視覚障害当事者団体
・　事務

＜その他＞

・　フリーランス
・　休職中、無職
・　介護実習普及センター

所属について、

・　全体では、「医療・介護従事者」が 84.1%、「教員・研究者（大学・専門学校、研究機関等）」が 10.9%だった。
・　理学療法では、「医療・介護従事者」が 77.4%、「教員・研究者（大学・専門学校、研究機関等）」が 20.5%だった。
・　作業療法では、「医療・介護従事者」が 86.5%、「教員・研究者（大学・専門学校、研究機関等）」が 8.6%だった。
・　言語聴覚療法では、「医療・介護従事者」が 77.5%、「教員・研究者（大学・専門学校、研究機関等）」が 18.3%だった。
・　視能訓練では、「医療・介護従事者」が 86.4%、「教員・研究者（大学・専門学校、研究機関等）」が 10.1%だった。
・　視覚障害者歩行（生活）訓練では、「教員・研究者（大学・専門学校、研究機関等）」が 33.3%、「医療・介護従事者」が 27.2%、その他が 17.3%だった。
・　医学では、「医療・介護従事者」が 59.3%、「教員・研究者（大学・専門学校、研究機関等）」が 37.0%だった。

#	Q2
設問	あなたの職場の種別を教えてください。(複数の勤務先がある場合は、比重が最も大きいものを選択してください)
解答形式	SA

図表 4- 2 職場種別

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行(生活)訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	4331	100.0%	412	100.0%	3135	100.0%	55	100.0%	665	100.0%	22	100.0%	32	100.0%
01. 急性期病院(大学病院、総合病院等)	1131	26.1%	66	16.0%	702	22.4%	10	18.2%	340	51.1%	1	4.5%	10	31.3%
02. 回復期病院	1088	25.1%	207	50.2%	821	26.2%	27	49.1%	16	2.4%	0	0.0%	16	50.0%
03. 維持期・療養型病院	388	9.0%	35	8.5%	330	10.5%	11	20.0%	10	1.5%	0	0.0%	2	6.3%
04. クリニック(診療所	396	9.1%	10	2.4%	97	3.1%	1	1.8%	284	42.7%	1	4.5%	2	6.3%
05. 入所系介護施設	284	6.6%	23	5.6%	256	8.2%	2	3.6%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.1%
06. 通所系介護事業所	244	5.6%	18	4.4%	223	7.1%	0	0.0%	1	0.2%	1	4.5%	0	0.0%
07. 訪問介護事業所・訪問看護ステーション	319	7.4%	25	6.1%	294	9.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
08. 障害者通所系事業	131	3.0%	2	0.5%	124	4.0%	1	1.8%	2	0.3%	1	4.5%	1	3.1%
09. 障害者入所系施設	105	2.4%	12	2.9%	88	2.8%	2	3.6%	0	0.0%	3	13.6%	0	0.0%
10. 障害者訪問系事業	18	0.4%	2	0.5%	9	0.3%	0	0.0%	0	0.0%	7	31.8%	0	0.0%
11. その他	227	5.2%	12	2.9%	191	6.1%	1	1.8%	12	1.8%	8	36.4%	0	0.0%

自由回答

＜医療機関＞

- ケアミックス病院
- リハビリテーションセンター
- 外来リハビリテーション
- 精神科病院、精神科デイケア
- 地域包括ケア病棟
- 小児病院
- 認知症疾患医療センター
- 眼科病院・診療所
- 訪問リハビリテーション事業所

＜高齢者支援＞

- 重度認知症デイケア
- サ高住
- 介護施設
-

＜障害福祉＞

- 社会福祉協議会
- 就労支援事業所、就労支援 B 型通所施設
- 住宅改修・福祉用具相談支援
- 障害者相談支援
- 障害者福祉サービス事業所
- 生活訓練施設

＜障害児支援＞

- 放課後等デイサービス

・　療育センター
・　医療型障害児入所施設
・　肢体不自由児施設・診療所
・　児童発達支援事業所
・　児童福祉施設
・　小児、重心施設
・　障害児　児童発達支援通所事業所
・　医療型障害児入所施設
・　視覚障害者支援施設職員

＜民間企業・団体＞

・　自費リハビリ
・　一般企業

＜行政関連＞

・　地域支援事業、介護予防事業
・　行政との委託事業
・　行政委託の相談支援センター
・　独立行政法人
・　地域包括支援センター
・　保健センター
・　視覚障害者情報提供施設

＜教育・研究機関＞

・　特別支援学校
・　保育所
・　学童保育
・　研究所

＜その他＞

・　個人事業主
・　休職中

職場種別について、

・　全体では、「急性期病院（大学病院、総合病院等）」が 26.1%、「回復期病院」が 25.1%、「クリニック（診療所等）」が 9.1%だった。
・　理学療法では、「回復期病院」が 50.2%、「急性期病院（大学病院、総合病院等）」が 16.0%、「維持期・療養型病院」が 8.5%だった。
・　作業療法では、「回復期病院」が 26.2%、「急性期病院（大学病院、総合病院等）」が 22.4%、「維持期・療養型病院」が 10.5%だった。
・　言語聴覚療法では、「回復期病院」が 49.1%、「維持期・療養型病院」が 20.0%、「急性期病院（大学病院、総合病院等）」が 18.2%だった。
・　視能訓練では、「急性期病院（大学病院、総合病院等）」が 51.1%、「クリニック（診療所等）」が 42.7%だった。
・　視覚障害者歩行（生活）訓練では、その他が 36.4%、「障害者訪問系事業所」が 31.8%、「障害者入所系施設」

が 13.6%だった。

・ 医学では、「回復期病院」が 50.0%、「急性期病院(大学病院、総合病院等)」が 31.3%、「維持期・療養型病院」と「クリニック(診療所等)」が 6.3%だった。

#	Q3
設問	Q1 で回答した属性におけるあなたの経験年数を教えてください。
解答形式	SA

図表 4-3 経験年数

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行(生活)訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5152	100.0%	532	100.0%	3624	100.0%	71	100.0%	770	100.0%	81	100.0%	54	100.0%
01. 1年未満	289	5.6%	36	6.8%	220	6.1%	4	5.6%	26	3.4%	0	0.0%	2	3.7%
02. 2~5年未満	646	12.5%	74	13.9%	474	13.1%	13	18.3%	72	9.4%	10	12.3%	2	3.7%
03. 5~10年未満	776	15.1%	92	17.3%	565	15.6%	11	15.5%	90	11.7%	13	16.0%	2	3.7%
04. 10~15年未満	876	17.0%	92	17.3%	650	17.9%	12	16.9%	98	12.7%	16	19.8%	5	9.3%
05. 15~20年未満	970	18.8%	102	19.2%	689	19.0%	12	16.9%	148	19.2%	13	16.0%	6	11.1%
06. 20年以上	1595	31.0%	136	25.6%	1026	28.3%	19	26.8%	336	43.6%	29	35.8%	37	68.5%

経験年数について、

・ 全体では、「20 年以上」が 31.0%、「15~20 年未満」が 18.8%、「10~15 年未満」が 17.0%だった。

・ 理学療法では、「20 年以上」が 25.6%、「15~20 年未満」が 19.2%、「5~10 年未満」と「10~15 年未満」が 17.3%だった。

・ 作業療法では、「20 年以上」が 28.3%、「15~20 年未満」が 19.0%、「10~15 年未満」が 17.9%だった。

・ 言語聴覚療法では、「20 年以上」が 26.8%、「2~5 年未満」が 18.3%、「10~15 年未満」と「15~20 年未満」が 16.9%だった。

・ 視能訓練では、「20 年以上」が 26.1%、「15~20 年未満」が 18.8%、「10~15 年未満」が 17.0%だった。

・ 視覚障害者歩行(生活)訓練では、「20 年以上」が 35.8%、「10~15 年未満」が 19.8%、「5~10 年未満」と「15~20 年未満」が 16.0%だった。

・ 医学では、「20 年以上」が 68.5%、「15~20 年未満」が 11.1%、「10~15 年未満」が 9.3%だった。

＃	Q4
設問	生涯教育として、受講した支援機器に関する学習の内容を教えてください。
解答形式	MA

図表 4-4 生涯教育

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5152	100.0%	532	100.0%	3624	100.0%	71	100.0%	770	100.0%	81	100.0%	54	100.0%
01. 支援機器の利活用に関する座学	3022	58.7%	370	69.5%	2072	57.2%	49	69.0%	431	56.0%	57	70.4%	31	57.4%
02. 支援機器の利活用に関する実習（演習）	1815	35.2%	250	47.0%	1193	32.9%	27	38.0%	268	34.8%	50	61.7%	19	35.2%
03. 支援機器の開発に関する座学	406	7.9%	72	13.5%	285	7.9%	4	5.6%	28	3.6%	5	6.2%	9	16.7%
04. 支援機器の開発に関する実習（演習）	226	4.4%	24	4.5%	172	4.7%	0	0.0%	16	2.1%	4	4.9%	8	14.8%
05. 支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習	1878	36.5%	242	45.5%	1233	34.0%	16	22.5%	310	40.3%	39	48.1%	30	55.6%
06.介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習	1018	19.8%	123	23.1%	778	21.5%	9	12.7%	68	8.8%	22	27.2%	10	18.5%
07. 支援機器の開発等に関するコンテストへの参加を通じた学習	117	2.3%	10	1.9%	93	2.6%	2	2.8%	8	1.0%	0	0.0%	2	3.7%
08. 大学の工学系学部等との連携による授業やワークショップを通じた学習	162	3.1%	23	4.3%	118	3.3%	0	0.0%	10	1.3%	3	3.7%	6	11.1%
09. 支援機器開発企業との連携による授業やワークショップを通じた学習	369	7.2%	44	8.3%	277	7.6%	4	5.6%	27	3.5%	7	8.6%	8	14.8%
10. 支援機器に関する学習はしていない	1401	27.3%	101	19.0%	1046	28.9%	12	16.9%	225	29.2%	6	7.4%	9	16.7%
11. その他	52	1.0%	6	1.1%	40	1.1%	1	1.4%	5	0.6%	0	0.0%	0	0.0%

自由回答

＜自己学習・課外活動・イベントなどへの参加＞

- 展示会
- 厚生労働省自立支援機器イノベーション人材育成事業への参加による学習
- インターネットによる独学、インターネット上での情報、動画
- 症例への対応に伴い、自主的に学習（インターネット検索など）
- 支援機器の関連団体への活動参加による学習
- 民間の支援団体による支援機器に関する勉強会
- 福祉住環境コーディネーターの仕事をしていた
- 福祉用具プランナー講習

＜臨床現場＞

- 実際の現場の見学
- 職場での事業者様を招待した自社研修、福祉用具デモ
- 勤務先での研修
- 補装具業者から患者さんを通して学ぶ

＜研究＞

- 学会等の展示
- 多職種、工学部、教育との共同研究や学習、研修
- 支援機器開発企業・大学との共同研究
- 大学院での研究

＜企業との連携＞

・　企業との車いす、機器開発に関わるプロセスの経験
・　企業と連携して開発のための実証評価を実施
・　企業へ直接問い合わせ
・　メーカーとの機器開発

＜その他＞

・　学生時の授業勉強会
・　学生対象の指導教員
・　うけていない
・　覚えていない

生涯教育について、

・　全体では、「支援機器の利活用に関する座学」が 58.7%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 36.5%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 35.2%だった。
・　理学療法では、「支援機器の利活用に関する座学」が69.5%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が47.0%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 45.5%だった。
・　作業療法では、「支援機器の利活用に関する座学」が 57.2%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 34.0%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 32.9%だった。
・　言語聴覚療法では、「支援機器の利活用に関する座学」が 69.0%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 38.0%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 22.5%だった。
・　視能訓練では、「支援機器の利活用に関する座学」が 56.0%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 40.3%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 34.8%だった。
・　視覚障害者歩行（生活）訓練では、「支援機器の利活用に関する座学」が 70.4%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 61.7%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 48.1%だった。
・　医学では、「支援機器の利活用に関する座学」が 57.4%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 55.6%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 35.2%だった。

＃	Q5
設問	生涯教育での支援機器に関する学習が、ご自身の支援機器への興味関心や臨床での実践等にどの程度影響を及ぼしましたか。
解答形式	SA

図表 4-5 生涯教育の影響

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5152	100.0%	532	100.0%	3624	100.0%	71	100.0%	770	100.0%	81	100.0%	54	100.0%
01.とても影響があった	1075	20.9%	148	27.8%	720	19.9%	9	12.7%	149	19.4%	28	34.6%	16	29.6%
02.まあ影響があった	2397	46.5%	235	44.2%	1680	46.4%	40	56.3%	362	47.0%	42	51.9%	29	53.7%
03.あまり影響はなかった	1017	19.7%	99	18.6%	723	20.0%	19	26.8%	160	20.8%	9	11.1%	4	7.4%
04.全く影響はなかった	663	12.9%	50	9.4%	501	13.8%	3	4.2%	99	12.9%	2	2.5%	5	9.3%

生涯教育の影響について、

- 全体では、「まあ影響があった」が 46.5%、「とても影響があった」が 20.9%、「あまり影響はなかった」が 19.7%だった。
- 理学療法では、「まあ影響があった」が 44.2%、「とても影響があった」が 27.8%、「あまり影響はなかった」が 18.6%だった。
- 作業療法では、「まあ影響があった」が 46.4%、「あまり影響はなかった」が 20.0%、「とても影響があった」が 19.9%だった。
- 言語聴覚療法では、「まあ影響があった」が 56.3%、「あまり影響はなかった」が 26.8%、「とても影響があった」が 12.7%だった。
- 視能訓練では、「まあ影響があった」が 47.0%、「あまり影響はなかった」が 20.8%、「とても影響があった」が 19.4%だった。
- 視覚障害者歩行(生活)訓練では、「まあ影響があった」が 51.9%、「とても影響があった」が 34.6%、「あまり影響はなかった」が 11.1%だった。
- 医学では、「まあ影響があった」が 53.7%、「とても影響があった」が 29.6%、「全く影響はなかった」が 9.3%だった。

＃	Q6
設問	在籍中もしくは卒業した養成校での授業として、受講した支援機器に関する学習の内容を教えてください。
解答形式	MA

図表 4-6 養成校教育

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5152	100.0%	532	100.0%	3624	100.0%	71	100.0%	770	100.0%	81	100.0%	54	100.0%
01. 支援機器の利活用に関する座学	3882	75.3%	391	73.5%	2818	77.8%	50	70.4%	517	67.1%	70	86.4%	22	40.7%
02. 支援機器の利活用に関する実習（演習）	2289	44.4%	235	44.2%	1646	45.4%	24	33.8%	301	39.1%	61	75.3%	13	24.1%
03. 支援機器の開発に関する座学	473	9.2%	39	7.3%	392	10.8%	2	2.8%	29	3.8%	5	6.2%	4	7.4%
04. 支援機器の開発に関する実習（演習）	298	5.8%	16	3.0%	265	7.3%	1	1.4%	12	1.6%	2	2.5%	1	1.9%
05. 支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習	542	10.5%	45	8.5%	348	9.6%	3	4.2%	113	14.7%	21	25.9%	8	14.8%
06. 介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習	559	10.9%	53	10.0%	450	12.4%	3	4.2%	32	4.2%	12	14.8%	6	11.1%
07. 支援機器の開発等に関するコンテストへの参加を通じた学習	43	0.8%	1	0.2%	35	1.0%	0	0.0%	6	0.8%	0	0.0%	1	1.9%
08. 大学の工学系学部等との連携による授業やワークショップを通じた学習	55	1.1%	11	2.1%	36	1.0%	1	1.4%	3	0.4%	2	2.5%	2	3.7%
09. 支援機器開発企業との連携による授業やワークショップを通じた学習	119	2.3%	13	2.4%	80	2.2%	1	1.4%	19	2.5%	5	6.2%	1	1.9%
10. 支援機器に関する学習はしていない	889	17.3%	95	17.9%	546	15.1%	16	22.5%	199	25.8%	5	6.2%	24	44.4%
11. その他	63	1.2%	15	2.8%	40	1.1%	0	0.0%	6	0.8%	1	1.2%	1	1.9%

自由回答

＜イベントなどへの参加＞

・　企業を招いての機器の研修会

・　展示会や学会等の参加。

＜臨床現場＞

・　臨床実習

・　実習先病院にて機器試用の症例見学

＜研究＞

・　研究室のゼミ

・　情報系大学院にて研究した

＜自主学習・課外活動＞

・　支援機器を作成したから

・　福祉工場の生産ライン、住居の見学

＜その他＞

・　環境制御装置という用語を習った程度

・　覚えていない

・　該当なし

養成校教育について、

- 全体では、「支援機器の利活用に関する座学」が 75.3%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 44.4%、「支援機器に関する学習はしていない」が 17.3%だった。
- 理学療法では、「支援機器の利活用に関する座学」が 73.5%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 44.2%、「支援機器に関する学習はしていない」が 17.9%だった。
- 作業療法では、「支援機器の利活用に関する座学」が 77.8%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 45.4%、「支援機器に関する学習はしていない」が 15.1%だった。
- 言語聴覚療法では、「支援機器の利活用に関する座学」が 70.4%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 33.8%、「支援機器に関する学習はしていない」が 22.5%だった。
- 視能訓練では、「支援機器の利活用に関する座学」が 67.1%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 39.1%、「支援機器に関する学習はしていない」が 25.8%だった。
- 視覚障害者歩行（生活）訓練では、「支援機器の利活用に関する座学」が 86.4%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 75.3%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 25.9%だった。
- 医学では、「支援機器に関する学習はしていない」が 44.4%、「支援機器の利活用に関する座学」が 40.7%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 24.1%だった。

＃	Q7
設問	養成校での支援機器に関する学習が、ご自身の支援機器への興味関心や進路選択等にどの程度影響を及ぼしましたか。
解答形式	SA

図表 4-7 養成校教育の影響

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5152	100.0%	532	100.0%	3624	100.0%	71	100.0%	770	100.0%	81	100.0%	54	100.0%
01.とても影響があった	593	11.5%	58	10.9%	404	11.1%	3	4.2%	87	11.3%	30	37.0%	8	14.8%
02.まあ影響があった	2290	44.4%	201	37.8%	1684	46.5%	32	45.1%	307	39.9%	42	51.9%	18	33.3%
03.あまり影響はなかった	1572	30.5%	185	34.8%	1104	30.5%	27	38.0%	235	30.5%	7	8.6%	7	13.0%
04.全く影響はなかった	697	13.5%	88	16.5%	432	11.9%	9	12.7%	141	18.3%	2	2.5%	21	38.9%

養成校教育の影響について、

- 全体では、「まあ影響があった」が 44.4%、「あまり影響はなかった」が 30.5%、「全く影響はなかった」が 13.5%だった。
- 理学療法では、「まあ影響があった」が 37.8%、「あまり影響はなかった」が 34.8%、「全く影響はなかった」が 16.5%だった。
- 作業療法では、「まあ影響があった」が 46.5%、「あまり影響はなかった」が 30.5%、「全く影響はなかった」が 11.9%だった。
- 言語聴覚療法では、「まあ影響があった」が 45.1%、「あまり影響はなかった」が 38.0%、「全く影響はなかった」が 12.7%だった。
- 視能訓練では、「まあ影響があった」が 39.9%、「あまり影響はなかった」が 30.5%、「全く影響はなかった」が 18.3%だった。
- 視覚障害者歩行（生活）訓練では、「まあ影響があった」が 51.9%、「とても影響があった」が 37.0%、「あまり影響はなかった」が 8.6%だった。
- 医学では、「全く影響はなかった」が 38.9%、「まあ影響があった」が 33.3%、「とても影響があった」が 14.8%だった。

＃	Q8
設問	支援機器の「開発」に対する興味関心の程度を教えてください。
解答形式	SA

図表 4-8 開発への関心

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5153	100.0%	532	100.0%	3624	100.0%	71	100.0%	770	100.0%	81	100.0%	54	100.0%
01.とても関心がある	1028	19.9%	120	22.6%	734	20.3%	18	25.4%	110	14.3%	22	27.2%	22	40.7%
02.まあ関心がある	2447	47.5%	229	43.0%	1743	48.1%	31	43.7%	357	46.4%	49	60.5%	23	42.6%
03.あまり関心はない	1431	27.8%	159	29.9%	984	27.2%	18	25.4%	249	32.3%	10	12.3%	8	14.8%
04.全く関心はない	246	4.8%	24	4.5%	163	4.5%	4	5.6%	54	7.0%	0	0.0%	1	1.9%

開発への関心について、

- 全体では、「まあ関心がある」が 47.5%、「あまり関心はない」が 27.8%、「とても関心がある」が 19.9%だった。
- 理学療法では、「まあ関心がある」が 43.0%、「あまり関心はない」が 29.9%、「とても関心がある」が 22.6%だった。
- 作業療法では、「まあ関心がある」が 48.1%、「あまり関心はない」が 27.2%、「とても関心がある」が 20.3%だった。
- 言語聴覚療法では、「まあ関心がある」が 43.7%、「とても関心がある」と「あまり関心はない」が 25.4%、「全く関心はない」が 5.6%だった。
- 視能訓練では、「まあ関心がある」が 46.4%、「あまり関心はない」が 32.3%、「とても関心がある」が 14.3%だった。
- 視覚障害者歩行（生活）訓練では、「まあ関心がある」が 60.5%、「とても関心がある」が 27.2%、「あまり関心はない」が 12.3%だった。
- 医学では、「まあ関心がある」が 42.6%、「とても関心がある」が 40.7%、「あまり関心はない」が 14.8%だった。

＃	Q9-1
設問	Q8 で「01. とても関心がある」、「02. まあ関心がある」を選択した場合）支援機器の開発に関心をもったきっかけを教えてください。
解答形式	MA

図表 4-9 開発に関心をもったきっかけ

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	3475	100.0%	349	100.0%	2477	100.0%	49	100.0%	467	100.0%	71	100.0%	45	100.0%
01. 養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった	465	13.4%	37	10.6%	327	13.2%	9	18.4%	65	13.9%	22	31.0%	3	6.7%
02. 養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった	361	10.4%	29	8.3%	253	10.2%	5	10.2%	47	10.1%	21	29.6%	3	6.7%
03. 臨床実習をきっかけに興味をもった	366	10.5%	30	8.6%	262	10.6%	3	6.1%	64	13.7%	2	2.8%	4	8.9%
04. 卒業研究をきっかけに興味をもった	73	2.1%	12	3.4%	46	1.9%	1	2.0%	9	1.9%	2	2.8%	2	4.4%
05. 養成校の自主学習（サークルや課外活動等）をきっかけに興味をもった	40	1.2%	4	1.1%	31	1.3%	0	0.0%	3	0.6%	2	2.8%	0	0.0%
06. 生涯教育（座学形式の研修・セミナー）をきっかけに興味をもった	401	11.5%	64	18.3%	253	10.2%	4	8.2%	67	14.3%	6	8.5%	7	15.6%
07. 生涯教育（演習形式の研修・セミナー）をきっかけに興味をもった	284	8.2%	49	14.0%	189	7.6%	2	4.1%	36	7.7%	4	5.6%	4	8.9%
08. 臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった	2387	68.7%	241	69.1%	1767	71.3%	37	75.5%	268	57.4%	34	47.9%	33	73.3%
09. 支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった	1162	33.4%	134	38.4%	828	33.4%	11	22.4%	139	29.8%	28	39.4%	19	42.2%
10.介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学をきっかけに興味をもった	304	8.7%	31	8.9%	236	9.5%	1	2.0%	23	4.9%	6	8.5%	3	6.7%
11. その他	158	4.5%	28	8.0%	112	4.5%	1	2.0%	10	2.1%	4	5.6%	1	2.2%

自由回答

＜個人的経験・周囲の影響＞

- 家族が支援機器を必要とする状況になったこと
- 同僚からの情報提供
- 自身や子供・親の支援の経験を通して関心をもった
- 親の仕事
- 同窓生が開発した為、刺激をもらった
- リハビリの学校に行く前に、実際に住環境コーディネーターとして働いていたので、OT になってからもかなり役に立った。
- 支援機器の開発に携わっていた知人からの情報
- 自身が補聴器の装用開始となり、購入のために調べた際興味を持った。
- 知り合いが開発をしている
- 日常で障害者と接して必要性を感じました。
- 支援機器ユーザーの口コミ

＜臨床現場での経験＞

- 臨床現場の経験を通じて必要性を感じたから
- 職場で機器の開発に関わったことがきっかけ
- 障がい者雇用に関与しているため

・　患者さんのニーズに合う機器がなかった時
・　患者への提供できるスキル向上のため
・　在宅での支援や、相談支援の中で、カスタマイズした機器の開発の必要性を感じる
・　利用者が機器を使用している様子を見て
・　支援機器を必要としている人をみている
・　卒後必要だったから

＜自己学習・課外活動・イベントなどへの参加＞

・　職能団体の仕事
・　厚生労働省自立支援機器イノベーション人材育成事業への参加をきっかけに興味をもった
・　支援機器に関する団体での課外活動
・　ボランティアの参加

＜技術・分野への興味＞

・　雑誌の特集を見たこと、工学部を志望していたことが影響した
・　最近 3D プリンタなどで、自助具など開発している SNS 投稿をみることがあり、開発の規模が個人レベルになってきていることを感じるから。
・　時流を感じるから。
・　機械科卒業で物作りが好きだから
・　ものづくりに興味があったこと
・　工業高校の卒業歴があり、元々ロボット工学などにも多少興味がある
・　もともとぎ技術系の仕事をしていたので、興味を持っていた。
・　工作や機械に関心があるから
・　R&D に興味関心が元々あり、支援機器に活用したいと考えていたため

＜研究＞

・　大学院へ進学して支援機器に関する研究を行う中で興味をもった
・　研究で携わったため。
・　工学系研究員との共同研究への研究協力を通して
・　学会参加、講義聴講
・　論文等で支援機器が紹介され興味を持った。

＜開発経験＞

・　業者との支援機器の開発・販売に関する協業がきっかけ
・　支援機器開発の補助金事業に携わることをきっかけに興味をもった
・　医療用装具メーカーのアドバイザーを務める事をきっかけに興味を持った
・　介護ロボットの開発に関わってから（ニーズシーズ）
・　企業の方の新規事業開拓の場に参加したこと
・　支援機器開発の経験
・　ベンチャー企業での開発兼任経験

＜メディア・社会環境の変化＞

・　SNS、インターネット記事
・　3D プリンタを使用したビジネスに関する記事や論文を読んだこと、
・　学会公演やネット上での情報

・　実際の利用者の話を聞いて興味を持った
・　社会環境の加味して
・　これからニーズが高まりそうだから
・　専門性を生かした事業として将来性を感じたこと
・　AI 進化など時代の進化に伴い、支援機器やリハビリ関連機器なども進化する必要があると感じた
・　昨今の技術革新を目の当たりにして
・　支援機器の実習の講師を行う中で専門職の理解が重要と感じたから

＜その他＞

・　有識者にあったため。
・　大学での学びを活かすため。
・　漠然と興味がある
・　地域生活において参加を促すために必要であると実感しているから。
・　ICT サポーターの兼務開始をきっかけに興味をもった
・　市町村からの連絡通知文、業務上の会議内のトピックス
・　支援機器の指導者だから
・　全く学べていない為
・　このアンケートで
・　特になし

開発に関心をもったきっかけについて、

・　全体では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 68.7%、「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 33.4%、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 13.4%だった。
・　理学療法では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 69.1%、「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 38.4%、「生涯教育（座学形式の研修・セミナー）をきっかけに興味をもった」が 18.3%だった。
・　作業療法では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 71.3%、「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 33.4%、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 13.2%だった。
・　言語聴覚療法では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 75.5%、「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 22.4%、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 18.4%だった。
・　視能訓練では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 57.4%、「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 29.8%、「生涯教育（座学形式の研修・セミナー）をきっかけに興味をもった」が 14.3%だった。
・　視覚障害者歩行（生活）訓練では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 47.9%、「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 39.4%、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 31.0%だった。
・　医学では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 73.3%、「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 42.2%、「生

涯教育(座学形式の研修・セミナー)をきっかけに興味をもった」が 15.6%だった。

#	Q9-2
設問	(Q8 で「03. あまり関心はない」、「04. 全く関心はない」を選択した場合)どのようなきっかけがあれば、支援機器の開発に関心を持つことができそうですか。
解答形式	MA

図表 4-10 開発に関心をもつために必要なきっかけ

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行(生活)訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	1677	100.0%	183	100.0%	1147	100.0%	22	100.0%	303	100.0%	10	100.0%	9	100.0%
01. 養成校教育(座学形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる	283	16.9%	25	13.7%	203	17.7%	4	18.2%	45	14.9%	5	50.0%	1	11.1%
02. 養成校教育(演習形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる	397	23.7%	44	24.0%	268	23.4%	7	31.8%	70	23.1%	6	60.0%	1	11.1%
03. 臨床実習で支援機器を実際に活用する	490	29.2%	62	33.9%	341	29.7%	8	36.4%	75	24.8%	2	20.0%	1	11.1%
04. 卒業研究で支援機器をテーマに取り上げる	129	7.7%	15	8.2%	83	7.2%	0	0.0%	29	9.6%	1	10.0%	0	0.0%
05. 養成校の自主学習(サークルや課外活動等)で支援機器に関する活動を行う	86	5.1%	9	4.9%	55	4.8%	1	4.5%	17	5.6%	3	30.0%	0	0.0%
06. 生涯教育(座学形式の研修・セミナー)で支援機器に関する内容を取り上げる	297	17.7%	33	18.0%	211	18.4%	2	9.1%	49	16.2%	0	0.0%	1	11.1%
07. 生涯教育(演習形式の研修・セミナー)で支援機器に関する内容を取り上げる	302	18.0%	36	19.7%	214	18.7%	3	13.6%	46	15.2%	0	0.0%	1	11.1%
08. 臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診療・リハビリ等を担当する	978	58.3%	108	59.0%	720	62.8%	8	36.4%	131	43.2%	5	50.0%	4	44.4%
09. 支援機器に関連する学会・展示会に参加する	505	30.1%	52	28.4%	355	31.0%	9	40.9%	80	26.4%	3	30.0%	3	33.3%
10.介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場へ見学に行く	234	14.0%	29	15.8%	180	15.7%	3	13.6%	18	5.9%	1	10.0%	0	0.0%
11. その他	51	3.0%	11	6.0%	32	2.8%	2	9.1%	5	1.7%	0	0.0%	1	11.1%

自由回答

＜臨床現場での必要性＞

- 生活期に携わり、こんなものがあったらという視点を身に着ける
- 臨床現場で必要であったら
- 利用者の意見を聞く機会がある
- 利用者に対応した際に困っているが対応機器がないとき。
- 実際に当事者が利用している現場に立ち会う。
- 支援機器に常時対応している臨床現場に研修に行く

＜自己学習・課外活動・イベントなど＞

- 実際の効果が提示された内容の講義・実演に参加する
- 支援機器の開発に作業療法士が携わるとどんな好影響を周りに与えることができるのかを学ぶ機会がある。
- 必要に応じて学習、対処する

＜実践的な学習＞

- 支援機器の開発に必要な実践的技術を教える授業を設ける

・　個別性に高くカスタマイズできるもの

＜将来像のイメージ＞

・　キャリアのイメージモデルについて

＜技術・分野への興味＞

・　興味がないと開発まで行おうという気になれない。
・　工学的な知識がないので，アイデアを伝える程度であればできると思う.
・　支援機器の活用や新しいデバイスの登場、その動向については興味があるものの、開発に携わる事へのハードルが勝ってしまい、中々興味を持つことは少ないと思う。

＜開発に関する経験＞

・　開発現場の見学実習。
・　実際作ってみる
・　開発に関する内容を聞く
・　関連の職場で働く

＜金銭面の補助＞

・　金銭的な補償
・　給与や勤務形態の説明。
・　全額補助金で導入可能で、加算がつくなら
・　支援機器のコストパフォーマンスが確認できれば
・　開発事業に従事することに給与面などのメリットがどれだけあるのかを知る機会がある

＜研究＞

・　身近な業者との機器開発研究

＜その他＞

・　「開発」という言葉のハードルが高く感じる。もしかしたら自分が思っている「開発」のイメージと実際示されている「開発」に乖離があるかもしれない。
・　時間を確保するのが難しい
・　時間がない
・　特になし

開発に関心を持つために必要なきっかけについて、

・　全体では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 58.3%、「支援機器に関連する学会・展示会に参加する」が 30.1%、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 29.2%だった。
・　理学療法では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 59.0%、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 33.9%、「支援機器に関連する学会・展示会に参加する」が 28.4%だった。
・　作業療法では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 62.8%、「支援機器に関連する学会・展示会に参加する」が 31.0%、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 29.7%だった。
・　言語聴覚療法では、「支援機器に関連する学会・展示会に参加する」が 40.9%、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」と「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 36.4%、「養成校教育（演習形式の授業）で支援機器に関する内容を取り上げる」が 31.8%だった。

・ 視能訓練では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 43.2%、「支援機器に関連する学会・展示会に参加する」が 26.4%、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 24.8%だった。
・ 視覚障害者歩行（生活）訓練では、「養成校教育（演習形式の授業）で支援機器に関する内容を取り上げる」が 60.0%、「養成校教育（座学形式の授業）で支援機器に関する内容を取り上げる」と「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 50.0%、「養成校の自主学習（サークルや課外活動等）で支援機器に関する活動を行う」と「支援機器に関連する学会・展示会に参加する」が 30.0%だった。
・ 医学では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 44.4%、「支援機器に関連する学会・展示会に参加する」が 33.3%だった。

#	Q10
設問	支援機器の「利活用」に対する興味関心の程度を教えてください。
解答形式	SA

図表 4-11 利活用への関心

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5151	100.0%	532	100.0%	3624	100.0%	71	100.0%	770	100.0%	81	100.0%	54	100.0%
01. とても関心がある	1597	31.0%	188	35.3%	1155	31.9%	28	39.4%	160	20.8%	38	46.9%	25	46.3%
02. まあ関心がある	2805	54.5%	265	49.8%	1976	54.5%	35	49.3%	446	57.9%	40	49.4%	28	51.9%
03. あまり関心はない	671	13.0%	72	13.5%	445	12.3%	7	9.9%	141	18.3%	3	3.7%	1	1.9%
04. 全く関心はない	79	1.5%	7	1.3%	48	1.3%	1	1.4%	23	3.0%	0	0.0%	0	0.0%

利活用への関心について、

・ 全体では、「まあ関心がある」が 54.5%、「とても関心がある」が 31.0%、「あまり関心はない」が 13.0%だった。
・ 理学療法では、「まあ関心がある」が 49.8%、「とても関心がある」が 35.3%、「あまり関心はない」が 13.5%だった。
・ 作業療法では、「まあ関心がある」が 54.5%、「とても関心がある」が 31.9%、「あまり関心はない」が 12.3%だった。
・ 言語聴覚療法では、「まあ関心がある」が 49.3%、「とても関心がある」が 39.4%、「あまり関心はない」が 9.9%だった。
・ 視能訓練では、「まあ関心がある」が 57.9%、「とても関心がある」が 20.8%、「あまり関心はない」が 18.3%だった。
・ 視覚障害者歩行（生活）訓練では、「まあ関心がある」が 49.4%、「とても関心がある」が 46.9%だった。
・ 医学では、「まあ関心がある」が 51.9%、「とても関心がある」が 46.3%だった。

＃	Q11-1
設問	（Q10 で「01. とても関心がある」、「02. まあ関心がある」を選択した場合）支援機器の利活用に関心をもったきっかけを教えてください。
解答形式	MA

図表 4-12 利活用に関心をもったきっかけ

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	4402	100.0%	453	100.0%	3131	100.0%	63	100.0%	606	100.0%	78	100.0%	53	100.0%
01. 養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった	664	15.1%	55	12.1%	462	14.8%	15	23.8%	95	15.7%	30	38.5%	5	9.4%
02. 養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった	463	10.5%	41	9.1%	307	9.8%	8	12.7%	69	11.4%	32	41.0%	4	7.5%
03. 臨床実習をきっかけに興味をもった	389	8.8%	37	8.2%	267	8.5%	5	7.9%	73	12.0%	4	5.1%	2	3.8%
04. 卒業研究をきっかけに興味をもった	76	1.7%	13	2.9%	46	1.5%	1	1.6%	12	2.0%	2	2.6%	2	3.8%
05. 養成校の自主学習（サークルや課外活動等）をきっかけに興味をもった	55	1.2%	7	1.5%	38	1.2%	0	0.0%	8	1.3%	2	2.6%	0	0.0%
06. 生涯教育（座学形式の研修・セミナー）をきっかけに興味をもった	459	10.4%	69	15.2%	288	9.2%	7	11.1%	76	12.5%	11	14.1%	7	13.2%
07. 生涯教育（演習形式の研修・セミナー）をきっかけに興味をもった	331	7.5%	53	11.7%	225	7.2%	2	3.2%	41	6.8%	8	10.3%	2	3.8%
08. 臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった	3056	69.4%	327	72.2%	2247	71.8%	42	66.7%	355	58.6%	41	52.6%	36	67.9%
09. 支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった	1333	30.3%	154	34.0%	954	30.5%	14	22.2%	158	26.1%	28	35.9%	19	35.8%
10.介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学をきっかけに興味をもった	347	7.9%	34	7.5%	279	8.9%	1	1.6%	24	4.0%	3	3.8%	2	3.8%
11. その他	163	3.7%	25	5.5%	110	3.5%	1	1.6%	20	3.3%	4	5.1%	1	1.9%

自由回答

＜個人的経験・周囲の影響＞

- 家族・身近な人が支援機器を必要となったこと
- 知人からの情報
- 学会や自分で申し込んだセミナーで講師の方が紹介したものだったから。
- 当事者だから
- 視覚に障害のある友人が実際に使っているのを見た為
- 実際の利用者の話を聞いて

＜自己学習・課外活動・イベントなどへの参加＞

- 厚生労働省自立支援機器イノベーション人材育成事業への参加をきっかけに興味をもった
- ロボットリハビリのコミュニティ
- 学生時代のアルバイトやボランティア活動をきっかけに興味を持った
- 県士会の活動を通して興味を持った
- 支援機器開発に関する団体の活動
- 作業療法士の専門領域だから支援機器の勉強は必要
- 地域活動における精神科リハ以外との協働
- 勉強会への参加
- 現在支援機器開発の研修に参加中

・　大学で盲学校の教員免許を取得するため、勉強していたため

＜臨床現場での経験＞

・　臨床業務上必要となったから。
・　ICT 導入について職場で検討しているため
・　業務改善や生産性向上に向けた取り組みを考える中で関心を持つようになりました。
・　臨床の場では、補助具対応の眼鏡屋に紹介してしまうので、実際に自身で担当してやってみたい、患者さんの実際の声を聞いてみたい。
・　臨床現場で患者の検査を担当したこと
・　利用者が機器を使用している様子を見て
・　ICT サポーター兼務開始をきっかけに興味をもった

＜技術・分野への興味＞

・　もともとものづくり・支援機器に興味関心があった
・　もともと技術系の仕事をしていたので関心があった。
・　前職業に関連する内容でもともと関心がある

＜研究＞

・　研究したことがきっかけ
・　自身の研究臨床を通して興味を持った
・　環境調整を含む活用事例の報告を受けて
・　論文を読んだこと
・　職場での工学研究者との共同研究に参加して
・　事例・研究発表

＜企業連携＞

・　企業から開発機器の評価の相談を受けてから。
・　業者との支援機器開発がきっかけ
・　開発機器の臨床での応用を依頼されて
・　現所属にて支援機器の開発機会があったため

＜SNS＞

・　SNS サイトでの自助具などの活用動画等を見る機会があったため。
・　AI などの技術進歩
・　SNS、ニュース
・　テレビやネットなどを通じて、支援を必要としている方々の困り事の全てが解決されているわけではないことが、わかるから

＜時勢に合わせた関心＞

・　様々な機器の開発発展がめざましいので
・　市町村の連絡通知文、業務上の会議のトピックス
・　これからの分野だから

＜障害当事者との関わり＞

・　職場である養成校にて当事者交流や講義を通して

＜業務内での経験＞

・　支援機器開発補助金事業への関わりの中で

・　支援機器を紹介・選定する仕事についているため
・　特に介護保険分野において専門職が活用の助言・指導を求められる場面が多いことから
・　生徒の授業
・　障がい者雇用に触れた関係で

＜その他＞

・　今回のアンケート記入から興味を持った
・　携わったことはないが興味はある
・　特になし

利活用に関心をもったきっかけについて、

・　全体では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 69.4%、「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 30.3%、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 15.1%だった。
・　理学療法では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 72.2%、「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 34.0%、「5 生涯教育（座学形式の研修・セミナー）をきっかけに興味をもった」が 15.2%だった。
・　作業療法では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 71.8%、「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 30.5%、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 14.8%だった。
・　言語聴覚療法では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 66.7%、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 23.8%、「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 22.2%だった。
・　視能訓練では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 58.6%、「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 26.1%、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 15.7%だった。
・　視覚障害者歩行（生活）訓練では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 52.6%、「養成校教育（演習形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 41.0%、「養成校教育（座学形式の授業）をきっかけに興味をもった」が 38.5%だった。
・　医学では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当したことをきっかけに興味をもった」が 67.9%、「支援機器に関連する学会・展示会への参加をきっかけに興味をもった」が 35.8%、「生涯教育（座学形式の研修・セミナー）をきっかけに興味をもった」が 13.2%だった。

＃	Q11-2
設問	(Q10 で「03. あまり関心はない」、「04. 全く関心はない」を選択した場合)どのようなきっかけがあれば、支援機器の利活用に関心を持つことができそうですか。
解答形式	MA

図表 4-13 利活用に関心をもつために必要なきっかけ

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行(生活)訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	750	100.0%	79	100.0%	493	100.0%	8	100.0%	164	100.0%	3	0.0%	1	0.0%
01. 養成校教育(座学形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる	123	16.4%	11	13.9%	80	16.2%	2	25.0%	29	17.7%	1	0.0%	0	0.0%
02. 養成校教育(演習形式の授業)で支援機器に関する内容を取り上げる	134	17.9%	14	17.7%	77	15.6%	3	37.5%	37	22.6%	2	0.0%	0	0.0%
03. 臨床実習で支援機器を実際に活用する	138	18.4%	27	34.2%	83	16.8%	2	25.0%	26	15.9%	0	0.0%	0	0.0%
04. 卒業研究で支援機器をテーマに取り上げる	26	3.5%	4	5.1%	16	3.2%	0	0.0%	6	3.7%	0	0.0%	0	0.0%
05. 養成校の自主学習(サークルや課外活動等)で支援機器に関する活動を行う	13	1.7%	1	1.3%	9	1.8%	0	0.0%	3	1.8%	0	0.0%	0	0.0%
06. 生涯教育(座学形式の研修・セミナー)で支援機器に関する内容を取り上げる	81	10.8%	11	13.9%	57	11.6%	1	12.5%	12	7.3%	0	0.0%	0	0.0%
07. 生涯教育(演習形式の研修・セミナー)で支援機器に関する内容を取り上げる	73	9.7%	11	13.9%	41	8.3%	1	12.5%	19	11.6%	0	0.0%	0	0.0%
08. 臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する	383	51.1%	39	49.4%	270	54.8%	5	62.5%	67	40.9%	0	0.0%	1	0.0%
09. 支援機器に関連する学会・展示会に参加する	162	21.6%	16	20.3%	102	20.7%	3	37.5%	37	22.6%	2	0.0%	0	0.0%
10.介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場へ見学に行く	113	15.1%	10	12.7%	75	15.2%	1	12.5%	24	14.6%	1	0.0%	0	0.0%
11. その他	17	2.3%	3	3.8%	12	2.4%	2	25.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

自由回答

＜講義＞

・ 実際の効果を記した講義などに参加する

＜臨床現場での必要性＞

・ 利用者の話を聞く機会がある

・ 実際リハビリで試してみる

・ 対象者の必要に応じて、情報収集する

・ 現場で必要だと思った時に該当する機器が手元になければそれまでなので、持続的関心には繋がらないと思う。

・ 支援機器を取り扱う(作成、調整)機会を増やす

＜研究＞

・ 学会等の講演や出展

＜メディア＞

・ メディアで取り上げられる。

＜時間・金銭的制約＞

・ 導入する施設に全額支給されれば

・ 時間的制約がなければ。

＜その他＞

・　そもそもイメージがわかない
・　興味ない

利活用に関心をもつために必要なきっかけについて、

・　全体では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 51.1%、「支援機器に関連する学会・展示会に参加する」が 21.6%、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 18.4%だった。
・　理学療法では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 49.4%、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 34.2%、「支援機器に関連する学会・展示会に参加する」が 20.3%だった。
・　作業療法では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 54.8%、「支援機器に関連する学会・展示会に参加する」が 20.7%、「臨床実習で支援機器を実際に活用する」が 16.8%だった。
・　言語聴覚療法では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 62.5%、「養成校教育（演習形式の授業）で支援機器に関する内容を取り上げる」と「10~15 年未満」と「支援機器に関連する学会・展示会に参加する」が 37.5%だった。
・　視能訓練では、「臨床現場で支援機器を必要とする障害者の診察・リハビリ等を担当する」が 40.9%、「養成校教育（演習形式の授業）で支援機器に関する内容を取り上げる」と「支援機器に関連する学会・展示会に参加する」が 22.6%、「養成校教育（座学形式の授業）で支援機器に関する内容を取り上げる」が 17.7%だった。

＃	Q12
設問	支援機器に関する授業・研修・セミナー等があれば受講してみたいと思いますか。
解答形式	SA

図表 4-14 支援機器教育に対する今後の受講希望

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5151	100.0%	532	100.0%	3624	100.0%	71	100.0%	770	100.0%	81	100.0%	54	100.0%
01.とても受講したい	1074	20.9%	123	23.1%	752	20.8%	18	25.4%	136	17.7%	24	29.6%	17	31.5%
02.まあ受講したい	3480	67.6%	340	63.9%	2478	68.4%	47	66.2%	518	67.3%	52	64.2%	33	61.1%
03.あまり受講したくない	525	10.2%	62	11.7%	345	9.5%	5	7.0%	100	13.0%	5	6.2%	4	7.4%
04.受講したくない	73	1.4%	7	1.3%	49	1.4%	1	1.4%	16	2.1%	0	0.0%	0	0.0%

支援機器教育に対する今後の受講希望について、

- 全体では、「まあ受講したい」が 67.6%、「とても受講したい」が 20.9%、「あまり受講したくない」が 10.2%だった。
- 理学療法では、「まあ受講したい」が 63.9%、「とても受講したい」が 23.1%、「あまり受講したくない」が 11.7%だった。
- 作業療法では、「まあ受講したい」が 68.4%、「とても受講したい」が 20.8%、「あまり受講したくない」が 9.5%だった。
- 言語聴覚療法では、「まあ受講したい」が 66.2%、「とても受講したい」が 25.4%、「あまり受講したくない」が 7.0%だった。
- 視能訓練では、「まあ受講したい」が 67.3%、「とても受講したい」が 17.7%、「あまり受講したくない」が 13.0%だった。
- 視覚障害者歩行（生活）訓練では、「まあ受講したい」が 64.2%、「とても受講したい」が 29.6%、「あまり受講したくない」が 6.2%だった。
- 医学では、「まあ受講したい」が 61.1%、「とても受講したい」が 31.5%、「あまり受講したくない」が 7.4%だった。

＃	Q13
設問	支援機器に関する授業・研修・セミナー等はどのような内容であれば受講してみたいと思いますか。
解答形式	MA

図表 4-15 受講したい内容

	全体		理学療法		作業療法		言語聴覚療法		視能訓練		視覚障害者歩行（生活）訓練		医学	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5151	100.0%	532	100.0%	3624	100.0%	71	100.0%	770	100.0%	81	100.0%	54	100.0%
01. 支援機器の利活用に関する座学	2303	44.7%	249	46.8%	1555	42.9%	36	50.7%	379	49.2%	50	61.7%	27	50.0%
02. 支援機器の利活用に関する実習（演習）	3170	61.5%	330	62.0%	2262	62.4%	46	64.8%	436	56.6%	65	80.2%	23	42.6%
03. 支援機器の開発に関する座学	1313	25.5%	163	30.6%	918	25.3%	17	23.9%	170	22.1%	22	27.2%	17	31.5%
04. 支援機器の開発に関する実習（演習）	1340	26.0%	170	32.0%	1005	27.7%	14	19.7%	118	15.3%	18	22.2%	10	18.5%
05. 支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習	1789	34.7%	197	37.0%	1192	32.9%	27	38.0%	310	40.3%	33	40.7%	24	44.4%
06. 介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習	1065	20.7%	112	21.1%	803	22.2%	11	15.5%	118	15.3%	6	7.4%	5	9.3%
07. 支援機器の開発等に関するコンテストへの参加を通じた学習	319	6.2%	48	9.0%	231	6.4%	3	4.2%	29	3.8%	3	3.7%	4	7.4%
08. 大学の工学系学部等との連携による授業やワークショップを通じた学習	1087	21.1%	132	24.8%	814	22.5%	13	18.3%	92	11.9%	15	18.5%	16	29.6%
09. 支援機器開発企業との連携による授業やワークショップを通じた学習	1626	31.6%	157	29.5%	1212	33.4%	20	28.2%	182	23.6%	35	43.2%	15	27.8%
10. その他	87	1.7%	12	2.3%	61	1.7%	3	4.2%	9	1.2%	1	1.2%	0	0.0%

自由回答

＜臨床現場につながる内容＞

- 効果が実感できるような内容
- 徒手療法を踏まえた支援機器の教育であれば受講してみたい
- モデル事業等を通した実例報告、導入例の報告
- 症例報告
- 支援機器を実装した活用事例の報告、事例分析
- 必要な担当者を持つこと
- 機器の使用方法を利用者に伝えたところまでを含めた研修。
- 支援機器を実際に使用されている方のお話
- 支援機器使用者との触れ合い座談会など

＜企業連携＞

- 医療介護現場の理学療法士と開発企業のコラボおよび研究企画
- 開発者との懇談
- 実際に開発や効果実証に関与したことがある人との交流
- 企業の方が病院に来て実際に紹介していただける

＜学会・イベント＞

- 関連学会での出展
- 利用者が参加できるイベント
- 実際の効果を示し有効的だと証明する内容の講義学習

＜技術・分野＞
・　3D プリンタの使用方法
・　自分の興味のある支援機器（アプリ、IT）に特化した内容
・　国際的に現段階で最新と言われる支援機器のデモ
・　グローバルな支援機器の展示や研修等
・　特定の領域の支援機器開発
＜金銭面の補助＞
・　扶助や少額の負担額で何が使えるかとかから知りたい。
・　資金調達の方法まで含めた内容。
＜支援制度・行政補助＞
・　デモ機の普及、医療費の制度改正
・　新しい製品や利用に関する制度に関するもの
＜多職種連携＞
・　他分野との交流
＜研究＞
・　学会での展示
＜実施形態＞
・　訪問現場や自宅で活用できるものがあれば受講したい
・　zoom を利用した研修
・　zoom 等の動画視聴夜間早朝に受講できるため
・　オンライン
・　オンデマンド配信のある形式
・　申込が煩雑でないもの。
・　宿泊なし
・　基礎学習がないので基礎があればよい、生涯学習を受けたことがない
・　講師にユーモアのセンスがあれば
・　金額が高額でないもの
＜その他＞
・　保険点数加算がのれば
・　受講したことがない
・　特になし

受講したい内容について、
・　全体では、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 61.5%、「支援機器の利活用に関する座学」が 44.7%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 34.7%だった。
・　理学療法では、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 62.0%、「支援機器の利活用に関する座学」が 46.8%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 37.0%だった。
・　作業療法では、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 62.4%、「支援機器の利活用に関する座学」が 42.9%、「支援機器開発企業との連携による授業やワークショップを通じた学習」が 33.4%だった。
・　言語聴覚療法では、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 64.8%、「支援機器の利活用に関する座

学」が 50.7%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 38.0%だった。

- 視能訓練では、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 56.6%、「支援機器の利活用に関する座学」が 49.2%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 40.3%だった。
- 視覚障害者歩行（生活）訓練では、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 80.2%、「支援機器の利活用に関する座学」が 61.7%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 40.7%だった。
- 医学では、「支援機器の利活用に関する座学」が 50.0%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 44.4%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 42.6%だった。

- **職場種別分類**

＃	Q4
設問	生涯教育として、受講した支援機器に関する学習の内容を教えてください。
解答形式	MA

図表 4-16 生涯教育

	全体		急性期病院		その他医療機関		介護事業所		障害事業所		その他	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	4331	100.0%	1131	100.0%	1872	100.0%	847	100.0%	254	100.0%	227	100.0%
01. 支援機器の利活用に関する座学	2481	57.3%	677	59.9%	1070	57.2%	463	54.7%	148	58.3%	123	54.2%
02. 支援機器の利活用に関する実習（演習）	1438	33.2%	377	33.3%	628	33.5%	262	30.9%	96	37.8%	75	33.0%
03. 支援機器の開発に関する座学	306	7.1%	78	6.9%	136	7.3%	58	6.8%	21	8.3%	13	5.7%
04. 支援機器の開発に関する実習（演習）	166	3.8%	44	3.9%	66	3.5%	33	3.9%	10	3.9%	13	5.7%
05. 支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習	1498	34.6%	417	36.9%	620	33.1%	276	32.6%	106	41.7%	79	34.8%
06.介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習	780	18.0%	181	16.0%	309	16.5%	193	22.8%	53	20.9%	44	19.4%
07. 支援機器の開発等に関するコンテストへの参加を通じた学習	80	1.8%	26	2.3%	27	1.4%	14	1.7%	8	3.1%	5	2.2%
08. 大学の工学系学部等との連携による授業やワークショップを通じた学習	111	2.6%	36	3.2%	42	2.2%	12	1.4%	12	4.7%	9	4.0%
09. 支援機器開発企業との連携による授業やワークショップを通じた学習	274	6.3%	66	5.8%	119	6.4%	49	5.8%	25	9.8%	15	6.6%
10. 支援機器に関する学習はしていない	1250	28.9%	301	26.6%	555	29.6%	251	29.6%	67	26.4%	76	33.5%
11. その他	46	1.1%	8	0.7%	21	1.1%	9	1.1%	2	0.8%	6	2.6%

生涯教育について、

- 全体では、「支援機器の利活用に関する座学」が 57.3%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 34.6%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 33.2%だった。
- 急性期病院では、「支援機器の利活用に関する座学」が 59.9%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 36.9%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 33.3%だった。
- その他医療機関では、「支援機器の利活用に関する座学」が 57.2%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 33.5%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 33.1%だった。
- 介護事業所では、「支援機器の利活用に関する座学」が 54.7%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 32.6%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 30.9%だった。
- 障害事業所では、「支援機器の利活用に関する座学」が 58.3%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 41.7%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 37.8%だった。
- その他では、「支援機器の利活用に関する座学」が 54.2%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 34.8%、「支援機器に関する学習はしていない」が 33.5%だった。

#	Q5
設問	在籍中もしくは卒業した養成校での授業として、受講した支援機器に関する学習の内容を教えてください。
解答形式	MA

図表 4-17 養成校教育

	全体		急性期病院		その他医療機関		介護事業所		障害事業所		その他	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	4331	100.0%	1131	100.0%	1872	100.0%	847	100.0%	254	100.0%	227	100.0%
01. 支援機器の利活用に関する座学	3234	74.7%	846	74.8%	1372	73.3%	637	75.2%	199	78.3%	180	79.3%
02. 支援機器の利活用に関する実習（演習）	1843	42.6%	447	39.5%	792	42.3%	377	44.5%	118	46.5%	109	48.0%
03. 支援機器の開発に関する座学	375	8.7%	89	7.9%	154	8.2%	78	9.2%	26	10.2%	28	12.3%
04. 支援機器の開発に関する実習（演習）	236	5.4%	53	4.7%	93	5.0%	50	5.9%	19	7.5%	21	9.3%
05. 支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習	424	9.8%	132	11.7%	170	9.1%	68	8.0%	29	11.4%	25	11.0%
06. 介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習	449	10.4%	109	9.6%	172	9.2%	118	13.9%	28	11.0%	22	9.7%
07. 支援機器の開発等に関するコンテストへの参加を通じた学習	28	0.6%	7	0.6%	11	0.6%	6	0.7%	3	1.2%	1	0.4%
08. 大学の工学系学部等との連携による授業やワークショップを通じた学習	41	0.9%	11	1.0%	17	0.9%	5	0.6%	6	2.4%	2	0.9%
09. 支援機器開発企業との連携による授業やワークショップを通じた学習	95	2.2%	25	2.2%	42	2.2%	14	1.7%	8	3.1%	6	2.6%
10. 支援機器に関する学習はしていない	775	17.9%	206	18.2%	348	18.6%	144	17.0%	37	14.6%	40	17.6%
11. その他	54	1.2%	11	1.0%	27	1.4%	9	1.1%	5	2.0%	2	0.9%

養成校教育について、

- 全体では、「支援機器の利活用に関する座学」が 74.7%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 42.6%、「支援機器に関する学習はしていない」が 17.9%だった。
- 急性期病院では、「支援機器の利活用に関する座学」が 74.8%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 39.5%、「支援機器に関する学習はしていない」が 18.2%だった。
- その他医療機関では、「支援機器の利活用に関する座学」が 73.3%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 42.3%、「支援機器に関する学習はしていない」が 18.6%だった。
- 介護事業所では、「支援機器の利活用に関する座学」が 75.2%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 44.5%、「支援機器に関する学習はしていない」が 17.0%だった。
- 障害事業所では、「支援機器の利活用に関する座学」が 78.3%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 46.5%、「支援機器に関する学習はしていない」が 14.6%だった。
- その他では、「支援機器の利活用に関する座学」が 79.3%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 48.0%、「支援機器に関する学習はしていない」が 17.6%だった。

＃	Q8
設問	支援機器の「開発」に対する興味関心の程度を教えてください。
解答形式	SA

図表 4-18 開発への関心

	全体		急性期病院		その他医療機関		介護事業所		障害事業所		その他	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	4331	100.0%	1131	100.0%	1872	100.0%	847	100.0%	254	100.0%	227	100.0%
01. とても関心がある	785	18.1%	200	17.7%	321	17.1%	163	19.2%	53	20.9%	48	21.1%
02. まあ関心がある	2017	46.6%	494	43.7%	886	47.3%	396	46.8%	142	55.9%	99	43.6%
03. あまり関心はない	1298	30.0%	365	32.3%	567	30.3%	248	29.3%	49	19.3%	69	30.4%
04. 全く関心はない	231	5.3%	72	6.4%	98	5.2%	40	4.7%	10	3.9%	11	4.8%

開発への関心について、

- 全体では、「まあ関心がある」が 46.6%、「あまり関心はない」が 30.0%、「とても関心がある」が 18.1%だった。
- 急性期病院では、「まあ関心がある」が 43.7%、「あまり関心はない」が 32.3%、「とても関心がある」が 17.7%だった。
- その他医療機関では、「まあ関心がある」が 47.3%、「あまり関心はない」が 30.3%、「とても関心がある」が 17.1%だった。
- 介護事業所では、「まあ関心がある」が 46.8%、「あまり関心はない」が 29.3%、「とても関心がある」が 19.2%だった。
- 障害事業所では、「まあ関心がある」が 55.9%、「とても関心がある」が 20.9%、「あまり関心はない」が 19.3%だった。
- その他では、「まあ関心がある」が 43.6%、「あまり関心はない」が 30.4%、「とても関心がある」が 21.1%だった。

＃	Q10
設問	支援機器の「利活用」に対する興味関心の程度を教えてください。
解答形式	SA

図表 4-19 利活用への関心

	全体		急性期病院		その他医療機関		介護事業所		障害事業所		その他	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	4331	100.0%	1131	100.0%	1872	100.0%	847	100.0%	254	100.0%	227	100.0%
01. とても関心がある	1276	29.5%	283	25.0%	537	28.7%	288	34.0%	102	40.2%	66	29.1%
02. まあ関心がある	2379	54.9%	635	56.1%	1046	55.9%	455	53.7%	121	47.6%	122	53.7%
03. あまり関心はない	605	14.0%	196	17.3%	254	13.6%	95	11.2%	26	10.2%	34	15.0%
04. 全く関心はない	71	1.6%	17	1.5%	35	1.9%	9	1.1%	5	2.0%	5	2.2%

利活用への関心について、

- 全体では、「まあ関心がある」が 54.9%、「とても関心がある」が 29.5%、「あまり関心はない」が 14.0%だった。
- 急性期病院では、「まあ関心がある」が 56.1%、「とても関心がある」が 25.0%、「あまり関心はない」が 17.3%だった。
- その他医療機関では、「まあ関心がある」が 55.9%、「とても関心がある」が 28.7%、「あまり関心はない」が 13.6%だった。
- 介護事業所では、「まあ関心がある」が 53.7%、「とても関心がある」が 34.0%、「あまり関心はない」が 11.2%だった。
- 障害事業所では、「まあ関心がある」が 47.6%、「とても関心がある」が 40.2%、「あまり関心はない」が 10.2%だった。
- その他では、「まあ関心がある」が 53.7%、「とても関心がある」が 29.1%、「あまり関心はない」が 15.0%だった。

＃	Q12
設問	支援機器に関する授業・研修・セミナー等があれば受講してみたいと思いますか。
解答形式	SA

図表 4-20 支援機器教育に対する今後の受講希望

	全体		急性期病院		その他医療機関		介護事業所		障害事業所		その他	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	4331	100.0%	1131	100.0%	1872	100.0%	847	100.0%	254	100.0%	227	100.0%
01. とても受講したい	884	20.4%	204	18.0%	375	20.0%	196	23.1%	66	26.0%	43	18.9%
02. まあ受講したい	2938	67.8%	781	69.1%	1277	68.2%	571	67.4%	162	63.8%	147	64.8%
03. あまり受講したくない	448	10.3%	129	11.4%	186	9.9%	73	8.6%	25	9.8%	35	15.4%
04. 受講したくない	61	1.4%	17	1.5%	34	1.8%	7	0.8%	1	0.4%	2	0.9%

支援機器教育に対する今後の受講希望について、

- 全体では、「まあ受講したい」が 67.8%、「とても受講したい」が 20.4%、「あまり受講したくない」が 10.3%だった。
- 急性期病院では、「まあ受講したい」が 69.1%、「とても受講したい」が 18.0%、「あまり受講したくない」が 11.4%だった。
- その他医療機関では、「まあ受講したい」が 68.2%、「とても受講したい」が 20.0%、「あまり受講したくない」が 9.9%だった。
- 介護事業所では、「まあ受講したい」が 67.4%、「とても受講したい」が 23.1%、「あまり受講したくない」が 8.6%だった。
- 障害事業所では、「まあ受講したい」が 63.8%、「とても受講したい」が 26.0%、「あまり受講したくない」が 9.8%だった。
- その他では、「まあ受講したい」が 64.8%、「とても受講したい」が 18.9%、「あまり受講したくない」が 15.4%だった。

- **経験年数分類**

＃	Q4
設問	生涯教育として、受講した支援機器に関する学習の内容を教えてください。
解答形式	MA

図表 4- 21 生涯教育

	全体		1年未満		2～5年未満		5～10年未満		10～15年未満		15～20年未満		20年以上	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5152	100.0%	289	100.0%	646	100.0%	776	100.0%	876	100.0%	970	100.0%	1595	100.0%
01. 支援機器の利活用に関する座学	3022	58.7%	133	46.0%	332	51.4%	411	53.0%	515	58.8%	594	61.2%	1037	65.0%
02. 支援機器の利活用に関する実習（演習）	1815	35.2%	74	25.6%	195	30.2%	234	30.2%	307	35.0%	363	37.4%	642	40.3%
03. 支援機器の開発に関する座学	406	7.9%	13	4.5%	47	7.3%	57	7.3%	70	8.0%	70	7.2%	149	9.3%
04. 支援機器の開発に関する実習（演習）	226	4.4%	7	2.4%	20	3.1%	28	3.6%	42	4.8%	38	3.9%	91	5.7%
05. 支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習	1878	36.5%	37	12.8%	160	24.8%	234	30.2%	304	34.7%	372	38.4%	771	48.3%
06.介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習	1018	19.8%	29	10.0%	82	12.7%	108	13.9%	154	17.6%	205	21.1%	440	27.6%
07. 支援機器の開発等に関するコンテストへの参加を通じた学習	117	2.3%	4	1.4%	13	2.0%	8	1.0%	19	2.2%	21	2.2%	52	3.3%
08. 大学の工学系学部等との連携による授業やワークショップを通じた学習	162	3.1%	4	1.4%	16	2.5%	17	2.2%	23	2.6%	26	2.7%	76	4.8%
09. 支援機器開発企業との連携による授業やワークショップを通じた学習	369	7.2%	11	3.8%	33	5.1%	38	4.9%	60	6.8%	68	7.0%	159	10.0%
10. 支援機器に関する学習はしていない	1401	27.3%	121	41.9%	229	35.4%	257	33.1%	226	25.8%	235	24.2%	336	21.1%
11. その他	52	1.0%	4	1.4%	6	0.9%	7	0.9%	8	0.9%	11	1.1%	16	1.0%

生涯教育について、

- 全体では、「支援機器の利活用に関する座学」が 58.7%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 36.5%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 35.2%だった。
- 1 年未満では、「支援機器の利活用に関する座学」が 46.0%、「支援機器に関する学習はしていない」が 41.9%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 25.6%だった。
- 2～5 年未満では、「支援機器の利活用に関する座学」が 51.4%、「支援機器に関する学習はしていない」が 35.4%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 30.2%だった。
- 5～10 年未満では、「支援機器の利活用に関する座学」が 53.0%、「支援機器に関する学習はしていない」が 33.1%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」と「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 30.2%だった。
- 10～15 年未満では、「支援機器の利活用に関する座学」が 58.8%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 35.0%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 34.7%だった。
- 15～20 年未満では、「支援機器の利活用に関する座学」が 61.2%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 38.4%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 37.4%だった。
- 20 年以上では、「支援機器の利活用に関する座学」が 65.0%、「支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習」が 48.3%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 40.3%だった。

＃	Q6
設問	在籍中もしくは卒業した養成校での授業として、受講した支援機器に関する学習の内容を教えてください。
解答形式	MA

図表 4-22 養成校教育

	全体		1年未満		2～5年未満		5～10年未満		10～15年未満		15～20年未満		20年以上	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5152	100.0%	289	100.0%	646	100.0%	776	100.0%	876	100.0%	970	100.0%	1595	100.0%
01. 支援機器の利活用に関する座学	3882	75.3%	221	76.5%	490	75.9%	569	73.3%	665	75.9%	748	77.1%	1189	74.5%
02. 支援機器の利活用に関する実習（演習）	2289	44.4%	132	45.7%	304	47.1%	320	41.2%	379	43.3%	456	47.0%	698	43.8%
03. 支援機器の開発に関する座学	473	9.2%	28	9.7%	80	12.4%	75	9.7%	87	9.9%	88	9.1%	115	7.2%
04. 支援機器の開発に関する実習（演習）	298	5.8%	19	6.6%	55	8.5%	40	5.2%	52	5.9%	53	5.5%	79	5.0%
05. 支援機器に関する学会・セミナー等への参加を通じた学習	542	10.5%	15	5.2%	64	9.9%	73	9.4%	96	11.0%	104	10.7%	190	11.9%
06. 介護実習普及センター等の支援機器の常設展示場への見学を通じた学習	559	10.9%	24	8.3%	62	9.6%	109	14.0%	90	10.3%	110	11.3%	164	10.3%
07. 支援機器の開発等に関するコンテストへの参加を通じた学習	43	0.8%	3	1.0%	12	1.9%	7	0.9%	5	0.6%	8	0.8%	8	0.5%
08. 大学の工学系学部等との連携による授業やワークショップを通じた学習	55	1.1%	6	2.1%	9	1.4%	13	1.7%	3	0.3%	7	0.7%	17	1.1%
09. 支援機器開発企業との連携による授業やワークショップを通じた学習	119	2.3%	11	3.8%	21	3.3%	18	2.3%	16	1.8%	19	2.0%	34	2.1%
10. 支援機器に関する学習はしていない	889	17.3%	47	16.3%	112	17.3%	144	18.6%	141	16.1%	150	15.5%	295	18.5%
11. その他	63	1.2%	0	0.0%	3	0.5%	15	1.9%	7	0.8%	13	1.3%	25	1.6%

養成校教育について、

- 全体では、「支援機器の利活用に関する座学」が 75.3%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 44.4%、「支援機器に関する学習はしていない」が 17.3%だった。
- 1 年未満では、「支援機器の利活用に関する座学」が 76.5%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 45.7%、「支援機器に関する学習はしていない」が 16.3%だった。
- 2～5 年未満では、「支援機器の利活用に関する座学」が 75.9%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 47.1%、「支援機器に関する学習はしていない」が 17.3%だった。
- 5～10 年未満では、「支援機器の利活用に関する座学」が 73.3%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 41.2%、「支援機器に関する学習はしていない」が 18.6%だった。
- 10～15 年未満では、「支援機器の利活用に関する座学」が 75.9%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 43.3%、「支援機器に関する学習はしていない」が 16.1%だった。
- 15～20 年未満では、「支援機器の利活用に関する座学」が 77.1%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 47.0%、「支援機器に関する学習はしていない」が 15.5%だった。
- 20 年以上では、「支援機器の利活用に関する座学」が 74.5%、「支援機器の利活用に関する実習（演習）」が 43.8%、「支援機器に関する学習はしていない」が 18.5%だった。

＃	Q8
設問	支援機器の「開発」に対する興味関心の程度を教えてください。
解答形式	SA

図表 4-23 開発への関心

	全体		1年未満		2～5年未満		5～10年未満		10～15年未満		15～20年未満		20年以上	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5152	100.0%	289	100.0%	646	100.0%	776	100.0%	876	100.0%	970	100.0%	1595	100.0%
01. とても関心がある	1028	20.0%	40	13.8%	110	17.0%	134	17.3%	171	19.5%	199	20.5%	374	23.4%
02. まあ関心がある	2447	47.5%	137	47.4%	282	43.7%	364	46.9%	394	45.0%	474	48.9%	796	49.9%
03. あまり関心はない	1431	27.8%	93	32.2%	217	33.6%	240	30.9%	253	28.9%	259	26.7%	369	23.1%
04. 全く関心はない	246	4.8%	19	6.6%	37	5.7%	38	4.9%	58	6.6%	38	3.9%	56	3.5%

開発への関心について、

- 全体では、「まあ関心がある」が 47.5%、「あまり関心はない」が 27.8%、「とても関心がある」が 20.0%だった。
- 1 年未満では、「まあ関心がある」が 47.4%、「あまり関心はない」が 32.2%、「とても関心がある」が 13.8%だった。
- 2～5 年未満では、「まあ関心がある」が 43.7%、「あまり関心はない」が 33.6%、「とても関心がある」が 17.0%だった。
- 5～10 年未満では、「まあ関心がある」が 46.9%、「あまり関心はない」が 30.9%、「とても関心がある」が 17.3%だった。
- 10～15 年未満では、「まあ関心がある」が 45.0%、「あまり関心はない」が 28.9%、「とても関心がある」が 19.5%だった。
- 15～20 年未満では、「まあ関心がある」が 48.9%、「あまり関心はない」が 26.7%、「とても関心がある」が 20.5%だった。
- 20 年以上では、「まあ関心がある」が 49.9%、「とても関心がある」が 23.4%、「あまり関心はない」が 23.1%だった。

＃	Q12
設問	支援機器の「利活用」に対する興味関心の程度を教えてください。
解答形式	SA

図表 4-24 利活用への関心

	全体		1年未満		2～5年未満		5～10年未満		10～15年未満		15～20年未満		20年以上	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5152	100.0%	289	100.0%	646	100.0%	776	100.0%	876	100.0%	970	100.0%	1595	100.0%
01.とても関心がある	1597	31.0%	71	24.6%	168	26.0%	227	29.3%	268	30.6%	323	33.3%	540	33.9%
02.まあ関心がある	2805	54.4%	167	57.8%	353	54.6%	429	55.3%	482	55.0%	510	52.6%	864	54.2%
03.あまり関心はない	671	13.0%	43	14.9%	116	18.0%	107	13.8%	105	12.0%	125	12.9%	175	11.0%
04.全く関心はない	79	1.5%	8	2.8%	9	1.4%	13	1.7%	21	2.4%	12	1.2%	16	1.0%

利活用への関心について、

- 全体では、「まあ関心がある」が 54.5%、「とても関心がある」が 31.0%、「あまり関心はない」が 13.0%だった。
- 1 年未満では、「まあ関心がある」が 57.8%、「とても関心がある」が 24.6%、「あまり関心はない」が 14.9%だった。
- 2～5 年未満では、「まあ関心がある」が 54.6%、「とても関心がある」が 26.0%、「あまり関心はない」が 18.0%だった。
- 5～10 年未満では、「まあ関心がある」が 55.3%、「とても関心がある」が 29.3%、「あまり関心はない」が 13.8%だった。
- 10～15 年未満では、「まあ関心がある」が 55.0%、「とても関心がある」が 30.6%、「あまり関心はない」が 12.0%だった。
- 15～20 年未満では、「まあ関心がある」が 52.6%、「とても関心がある」が 33.3%、「あまり関心はない」が 12.9%だった。
- 20 年以上では、「まあ関心がある」が 54.2%、「とても関心がある」が 33.9%、「あまり関心はない」が 11.0%だった。

＃	Q12
設問	支援機器に関する授業・研修・セミナー等があれば受講してみたいと思いますか。
解答形式	SA

図表 4-25 支援機器教育に対する今後の受講希望

	全体		1年未満		2～5年未満		5～10年未満		10～15年未満		15～20年未満		20年以上	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	5152	100.0%	289	100.0%	646	100.0%	776	100.0%	876	100.0%	970	100.0%	1595	100.0%
01. とても受講したい	1074	20.8%	57	19.7%	127	19.7%	169	21.8%	187	21.3%	217	22.4%	317	19.9%
02. まあ受講したい	3480	67.5%	197	68.2%	434	67.2%	517	66.6%	588	67.1%	653	67.3%	1091	68.4%
03. あまり受講したくない	525	10.2%	27	9.3%	76	11.8%	80	10.3%	84	9.6%	92	9.5%	166	10.4%
04. 受講したくない	73	1.4%	8	2.8%	9	1.4%	10	1.3%	17	1.9%	8	0.8%	21	1.3%

支援機器教育に対する今後の受講希望について、

- 全体では、「まあ受講したい」が 67.5%、「とても受講したい」が 20.8%、「あまり受講したくない」が 10.2%だった。
- 1 年未満では、「まあ受講したい」が 68.2%、「とても受講したい」が 19.7%、「あまり受講したくない」が 9.3%だった。
- 2～5 年未満では、「まあ受講したい」が 67.2%、「とても受講したい」が 19.7%、「あまり受講したくない」が 11.8%だった。
- 5～10 年未満では、「まあ受講したい」が 66.6%、「とても受講したい」が 21.8%、「あまり受講したくない」が 10.3%だった。
- 10～15 年未満では、「まあ受講したい」が 67.1%、「とても受講したい」が 21.3%、「あまり受講したくない」が 9.6%だった。
- 15～20 年未満では、「まあ受講したい」が 67.3%、「とても受講したい」が 22.4%、「あまり受講したくない」が 9.5%だった。
- 20 年以上では、「まあ受講したい」が 68.4%、「とても受講したい」が 19.9%、「あまり受講したくない」が 10.4%だった。